出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

第16集

KAMIENYA TUKIYAMA KOFUN

上塩冶築山古墳

TUNODEN ISEKI

角田遺跡

TAKAOKA 2 ISEKI

高岡Ⅱ遺跡

NAKAMURA 1 GOUFUN

中村１号墳出土装飾大刀

２００６年3月

出雲市教育委員会

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書　第16集

正　誤　表

訂正箇所	誤	正
Ｐ２～Ｐ８ 本文	周濠	周壕
Ｐ２ 挿図２Ｔ写植①④	①かく乱土１ ④カクラン土２	①撹乱土１ ②撹乱土２
Ｐ３ 下から４行目	粗いナデが施す。	粗いナデを施す。
Ｐ６ 挿図写植	周墳中心点	周壕中心点
Ｐ７ 下段キャプション	上塩冶墳山古墳墳丘出土物	上塩冶築山古墳墳丘関連出土遺物
Ｐ８ ７～８行目	須恵子持壺	須恵器子持壺
Ｐ１２ ３～４行目	打ち込まれたと杭群のみである	打ち込まれた杭群のみである
Ｐ２０ 下から１０行目	鼓型器台	鼓形器台
Ｐ３２ 下段キャプション	中村１号墳出土装飾太刀Ｘ線写真	中村１号墳出土装飾大刀Ｘ線写真

序

平成17年３月に市町村合併を行い新「出雲市」として発足した当市は、出雲大社境内遺跡・猪目洞窟遺跡・西谷墳墓群・今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳など、全国的にも貴重な埋蔵文化財がこれまで以上に集中する地域となりました。

当市においては、近年の大規模開発によって発掘調査は格段に増加し、新たな歴史的発見が相次いでいる一方、調査終了後に貴重な遺跡が徐々に失われていっています。

旧出雲市では平成元年から出雲市埋蔵文化財発掘報告書を刊行し、こうした開発によって失われながらも今まで紹介されなかった遺跡を中心に調査の記録を報告してまいりました。市町村合併後も新市全域に対象地域を拡大し、継続して本書刊行の運びとなりました。

今年度は、平成17年度に調査を実施しました上塩冶築山古墳、高岡Ⅱ遺跡、16年度に調査を実施しました角田遺跡、平成14年度に取り上げを行いました中村１号墳出土装飾大刀の報告をまとめました。本書が出雲の歴史解明のための一助となれば幸いに存じます。

最後に、本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に心から御礼申し上げます。

出雲市教育委員会
教育長　黒　目　俊　策

例　　言

1．本書はこれまでに実施した埋蔵文化財調査のうち、未報告の一部についてまとめたものであり、下記４遺跡について取り扱っている。

○上塩冶築山遺跡（発掘調査報告）

・調 査 原 因：個人住宅建替に伴う範囲確認調査

・調 査 期 間：平成17年８月５日～９日

・調　査　地：出雲市上塩冶町262番地１

・調 査 体 制：調査主体　出雲市教育委員会

事務局　　神門勉（出雲市文化観光部文化財課課長）

調査員　　藤永照隆（同副主任主事）

作業員　　杉原秀雄、古川八郎

○角田遺跡（発掘調査報告）

・調 査 原 因：出雲市都市計画道路天神一の谷線道路改良工事

・調 査 期 間：平成16年８月18日～平成16年９月28日

・調　査　地：出雲市上塩冶町959－４ほか

・調 査 体 制：調査主体　出雲市教育委員会

事務局　　川上稔（出雲市文化企画部芸術文化振興課文化財室室長）

調査員　　藤永照隆（同副主任主事）

作業員　　前島利輝、小玉順子、上代勇、高橋誠二、春岡文夫、長島節子、花田和子

○高岡Ⅱ遺跡（試掘調査報告）

・調 査 原 因：開発事業に伴う試掘調査

・調 査 期 間：平成17年９月９日

・調　査　地：出雲市高岡町

・調 査 体 制：調査主体　出雲市教育委員会

事務局　　神門勉（出雲市文化観光部文化財課課長）

調査員　　遠藤正樹（同主任）

○中村１号墳（装飾大刀保存処理に伴う分析報告）

・委　託　者：出雲市

・保 存 処 理：財団法人　元興寺文化財研究所

・分析報告者：財団法人　元興寺文化財研究所　橋本英将

2．本書で使用した方位は真北、標高は海抜、座標は日本測地系を用いている。

3．本書に報告した出土遺物、図面、写真等は出雲市において保管している。

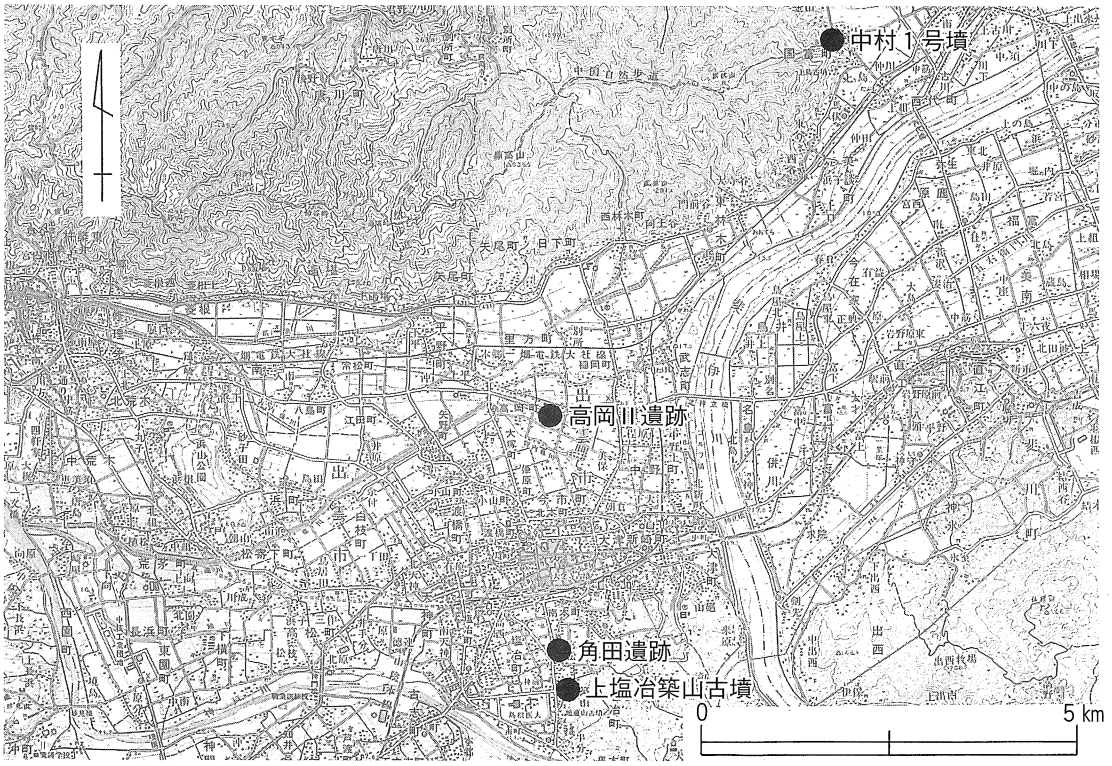
4．本書の編集・執筆は基本的に須賀照隆（出雲市文化観光部文化財課副主任）が行ったが、中村１

号墳出土装飾大刀についての報告は橋本英将氏（財団法人元興寺文化財研究所）に寄稿いただいた。

また、各現地調査に際しては、開発者及び地元の方々から多大なご理解・ご協力を賜った。記して謝意を表す。

5．遺物整理等にあたっては、次の方々に従事していただいた。

高橋亜紀、岩崎晶美、深津光子ほか



目　　次

Ⅰ．上塩冶築山古墳墳丘の調査（須賀照隆）…… 1
　1．調査に至る経緯
　2．調査の概要
　3．まとめ

Ⅱ．平成16年度角田遺跡発掘調査（須賀照隆）…… 9
　1．調査に至る経緯
　2．過去の調査
　3．調査の概要
　4．まとめ

Ⅲ．高岡Ⅱ遺跡の発見（須賀照隆）…… 19
　1．発見の経緯
　2．試掘調査の概要
　3．遺構と遺物
　4．まとめ

Ⅳ．らせん状柄巻をもつ装飾大刀（元興寺文化財研究所　橋本英将）…… 23
　－中村１号墳出土大刀の検討から－
　　はじめに
　1．装飾大刀の材質と構造
　2．らせん状柄巻をもつ大刀
　3．中村１号墳出土大刀の意義

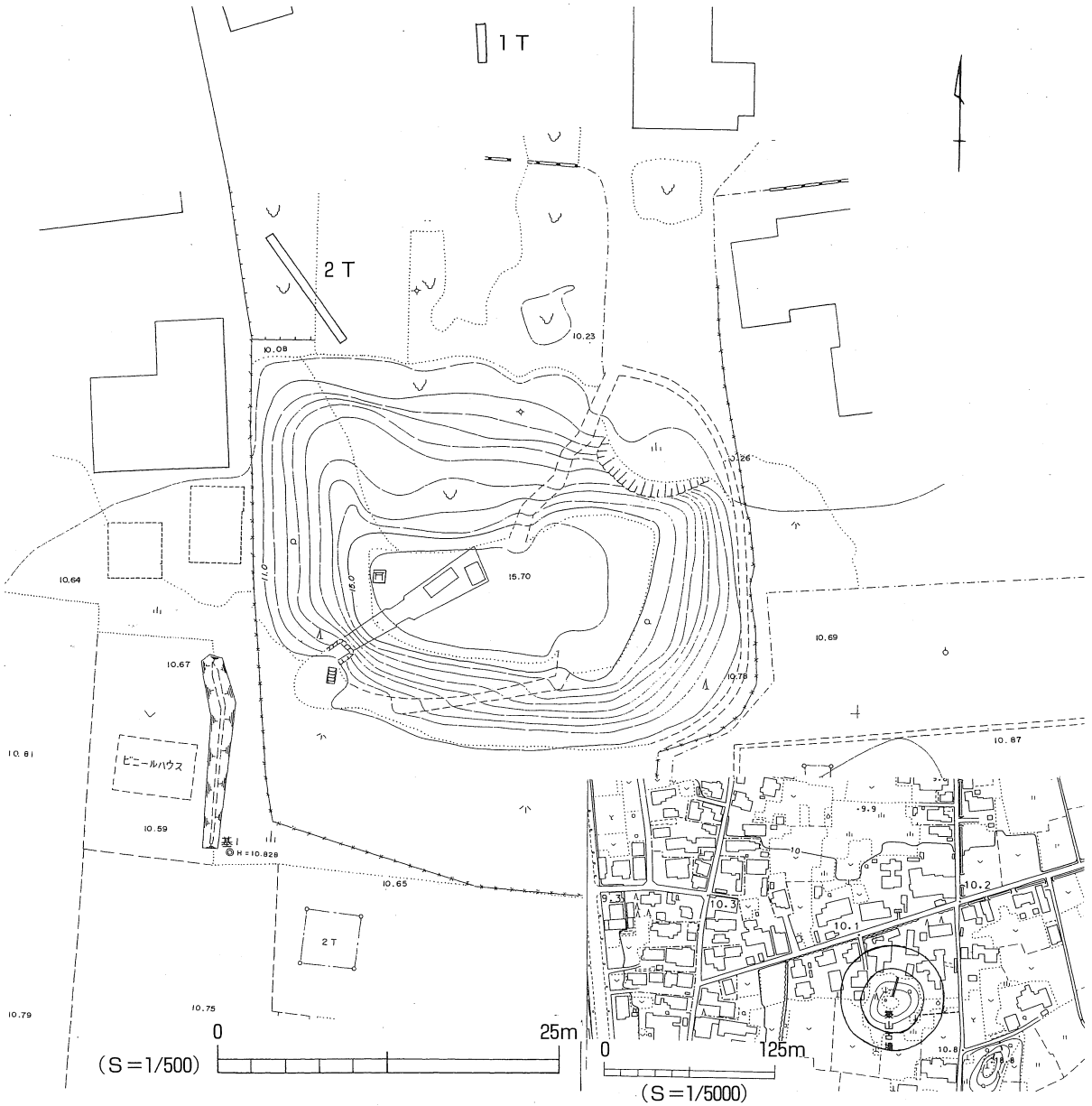
図版 …… 33

上塩冶築山古墳墳丘の調査

1．調査に至る経緯

上塩冶築山古墳は墳丘の一部が国史跡に指定されているが、古墳の範囲は指定地よりも大きく広がることが近年の調査からも明らかになっている。しかしながら、墳丘北半部にあたる部分の宅地化が早くから進んでおり範囲確認調査が実施できなかったため、規模・形状の確定にまでは至っていなかった。

こうした状況の中で、今回土地所有者の方の住居建替えに伴い一時的に墳丘北側の建物が解体されるという機会を得たため、出雲市で遺跡の範囲確認を目的とした発掘調査を実施することとなった。



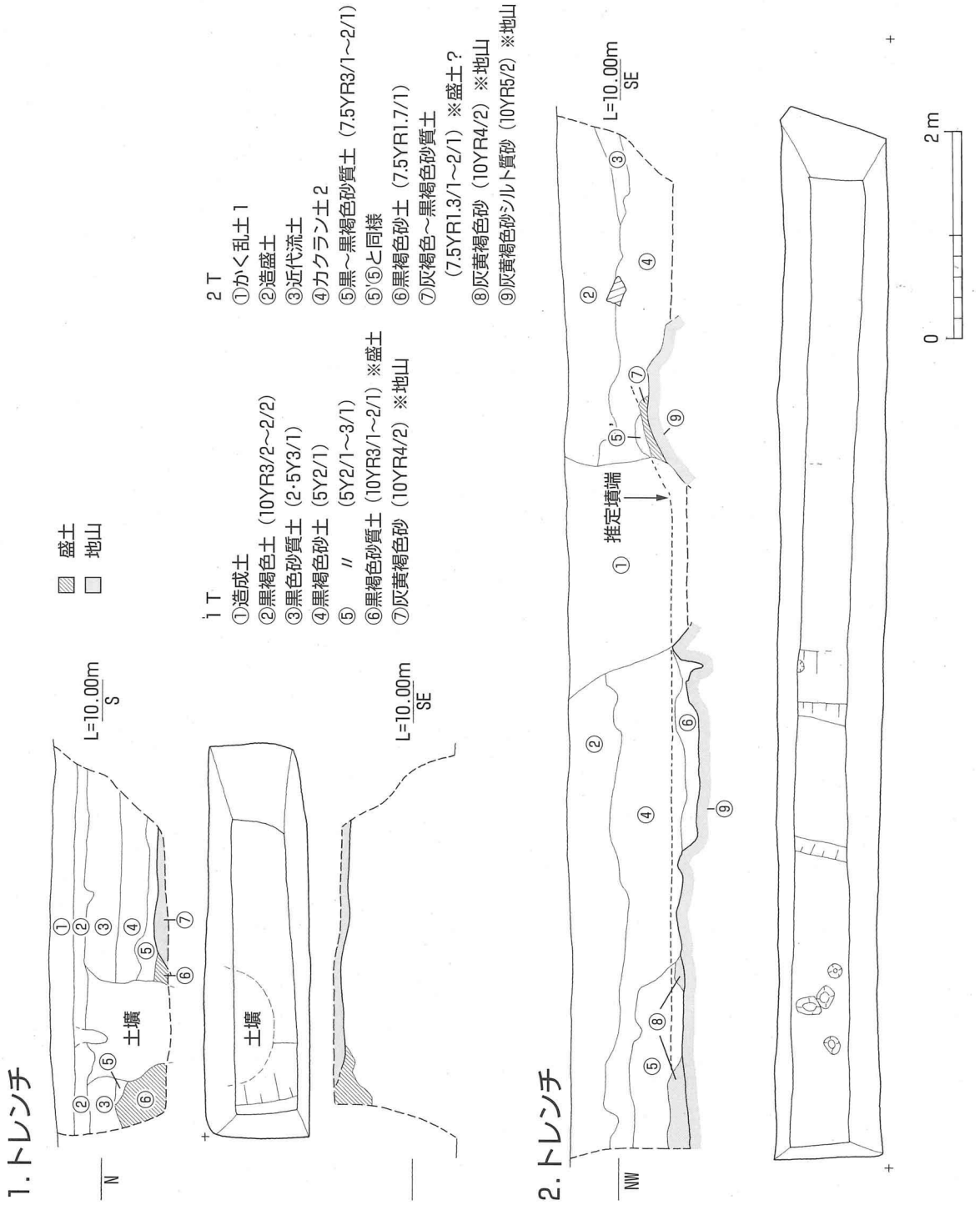
第１図　調査地位置図

2．調査の概要

今回の調査は、墳丘北側の遺跡範囲確認を目的として、平成17年８月５、８、９日の３日間でトレンチ調査によって実施した。

調査は本古墳が円墳であった場合を想定し、古墳北側部分における墳裾推定範囲と周濠外縁推定範囲の２箇所に幅１ｍのトレンチを設定した。

＜１トレンチ＞　１トレンチでは周濠外縁部が確認された。過去の調査では、周濠部は地山削り出しによる形成のみが確認されていたが、今回の調査箇所においては地山地形が北方に向けて落ち込んで



第２図　遺構実測図（Ｓ＝1/60）

おり、周濠底面の一部と周堤部は盛土によって形成されていたことが判明した。

周濠底面の標高は約9.5m、周堤残存頂部の標高は9.9mを測る。

遺物はいずれも小片であり図化しなかったが、須恵器、円筒埴輪、中世土師器などが確認されている。

＜２トレンチ＞　２トレンチでは近現代の攪乱が著しく墳丘部の大部分が破壊されていたが、残存部の状況から墳裾位置が推定可能であった。

墳裾の位置は攪乱土１の南東端付近に存在したものと考えられる。墳裾部及び周濠底部の推定標高は約9.5m前後である。

また、墳裾推定位置よりさらに北西側では幅1.9m以上、深さ25～30cmの溝状遺構が確認される。このような溝は平成12・13年度の調査においてもいくつか見られるが、周濠の中ほどに掘られるものが多く、これらに連続するものかどうかは不明である。

遺物は周濠内埋土より須恵器、円筒埴輪などが、周濠内溝より埴輪小片が確認されている。

＜出土遺物＞（第３図）　第３図は２トレンチの出土遺物である。いずれも周濠内堆積土層から出土したもののみを図化した。

１～２、４～11は円筒埴輪で、１～２が口縁部、４～７が胴部、８～11が底部の破片である。

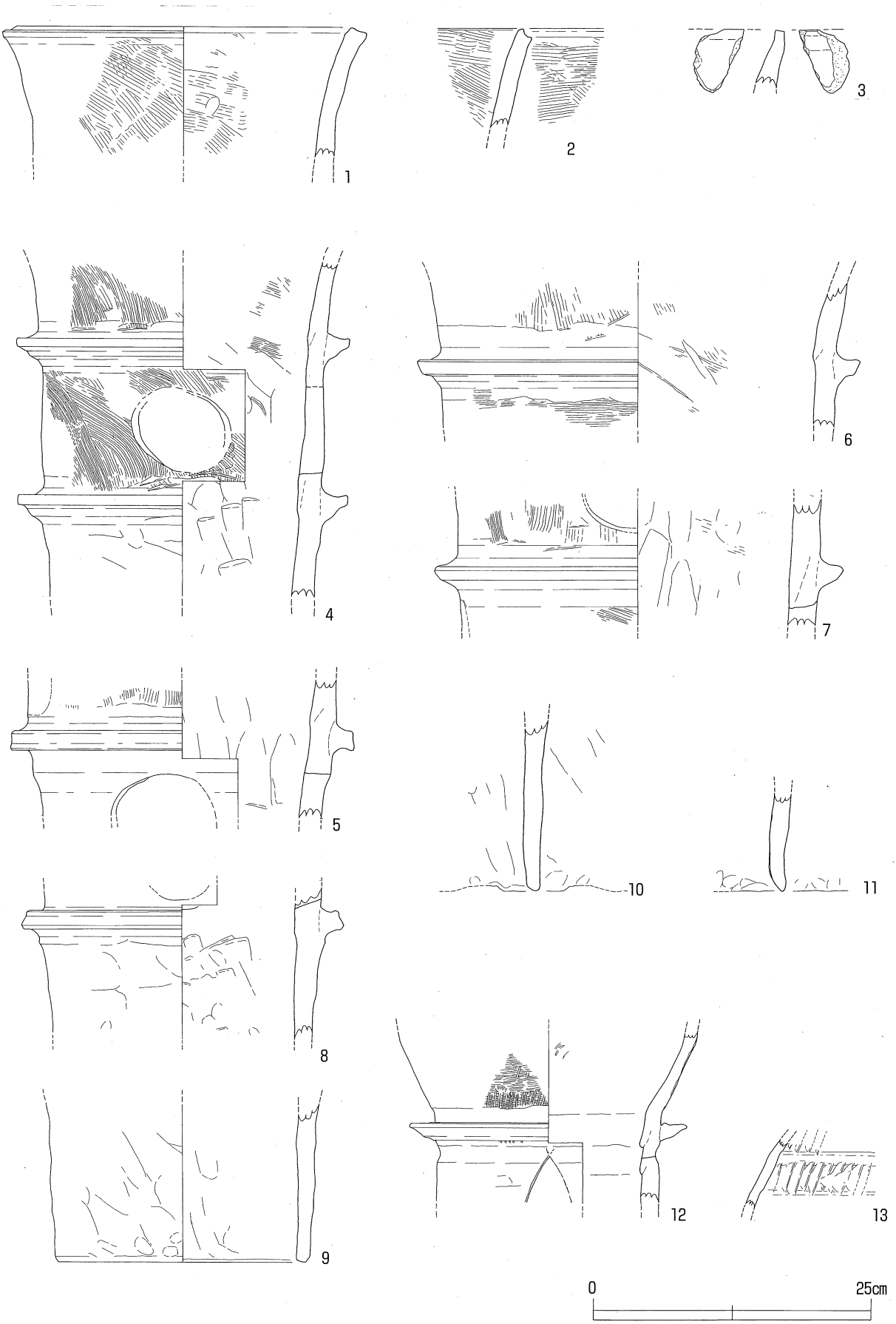
胴部以上はいずれも外面一時調整タテ・ナナメハケのみを基調とし、明確な２次調整を持たない。６に見えるヨコハケ調整も１次調整時のものであり、ナナメハケの延長で横方向になった可能性が残る。内面はいずれも胴部までハケ後ナデ調整、口縁部付近ナナメハケ調整が施される。スカシが確認されるものは４、５、７で、いずれも胴部のみに１段一対で円形スカシが確認される。その形状・調整から見て、タガ２段の形状と判別できるものが４、タガ３段以上の形状と判別されるものが５、７の個体である。

底部にはいずれも底部調整が施されている。内面には板状・棒状工具痕が明瞭に残り、外面は工具または指による強いナデが施される。端部は指オサエによって整えられている。

３についても円筒埴輪口縁部である可能性があるが、内外面に丁寧なナデが施されること、端部の形状が他の円筒埴輪片と異なることなどから、形象埴輪等の可能性もあると考える。

12は須恵器子持壺の胴・脚接合部付近の破片である。親壺の胴部は膨らみが大きく、外面平行タタキ後ヨコハケ、内面同心円状タタキ後ナデ調整が施される。脚部は親壺との接合部に突帯を貼り付け、内外面に横方向の粗いナデが施す。また、歪んだ三角形状のスカシが穿孔される。

上塩冶築山古墳から過去の調査で出土した子持壺には、肩部のみに小壺が付くタイプと胴部全面に小壺を貼り付けるタイプが確認されているが、プロポーション、調整技法等から今回の調査で出土した子持壺は前者のタイプであると推定される。



第３図　２Ｔ周壕内堆積土出土遺物実測図

3．まとめ

（1）これまでの墳丘研究

墳形に関して言及した記載の初現は、1907年にイギリス人考古学者ウイリアム・ガウランドが「ダブル＝マウンド」つまり前方後円墳として報告したことに始まる。

しかし、1919年の東京帝国大学の梅原末治による報告においては、すでに墳形は「丸塚」つまり円墳と観察されている。

その後1951年には山本清が等高線の形状、石室の位置等から墳丘規模・形状の復元を試みている。ここでは直径43m程度、高さ約6.5m程度の円墳と推定しているほか、円筒埴輪の存在も初めて指摘された。

以後出雲市教育委員会による1985年の周辺部発掘調査（第４図１－１Ｔ）で特徴的な須恵器子持壺の存在が明らかになったほか、2000～2001年度にかけて実施された範囲確認調査（第４図２－１～８Ｔ）では幅15m程度の周濠を持つ全長77m、墳丘直径45～50mの円形墳と推定されている。

梅原末治の観察以後、いずれの調査・報告においても上塩冶築山古墳は円墳の可能性が高いとされているが、本古墳を最初に観察したウイリアム・ガウランドの見解は重く、現在まで前方後円墳の可能性を否定しきれない状況が続いていた。

（2）墳丘（第４図）

墳丘の規模・形状は今回の調査（第４図３－１、２Ｔ）によってほぼ確定した。これまでのトレンチ配置、周濠幅等を勘案すると、ウイリアム・ガウランドの報告以来長く議論されてきた前方後円墳の可能性はほぼ否定されたと考えてよいであろう。仮にトレンチ密度の薄い残丘部の西北西方向もしくは東北東方向に前方部が存在すると仮定したとしても、周濠の幅等を勘案するとトレンチ間に前方部の墳丘・周濠が収まる可能性は非常に低いと考える。

また、2001年度までの調査でやや不明確であった墳丘規模についても、今回推定された北側墳裾位置と過去の各トレンチで最も明瞭な傾斜変換点を結んだ線がほぼ正円につながることから、本調査によってほぼ確定したと考えて良いであろう。

よって、今回の調査の結果、上塩冶築山古墳は墳丘径約46m、周濠径約77mの円墳であると考えられる。但し、墳丘と周濠の直径には若干のずれがあるようである。

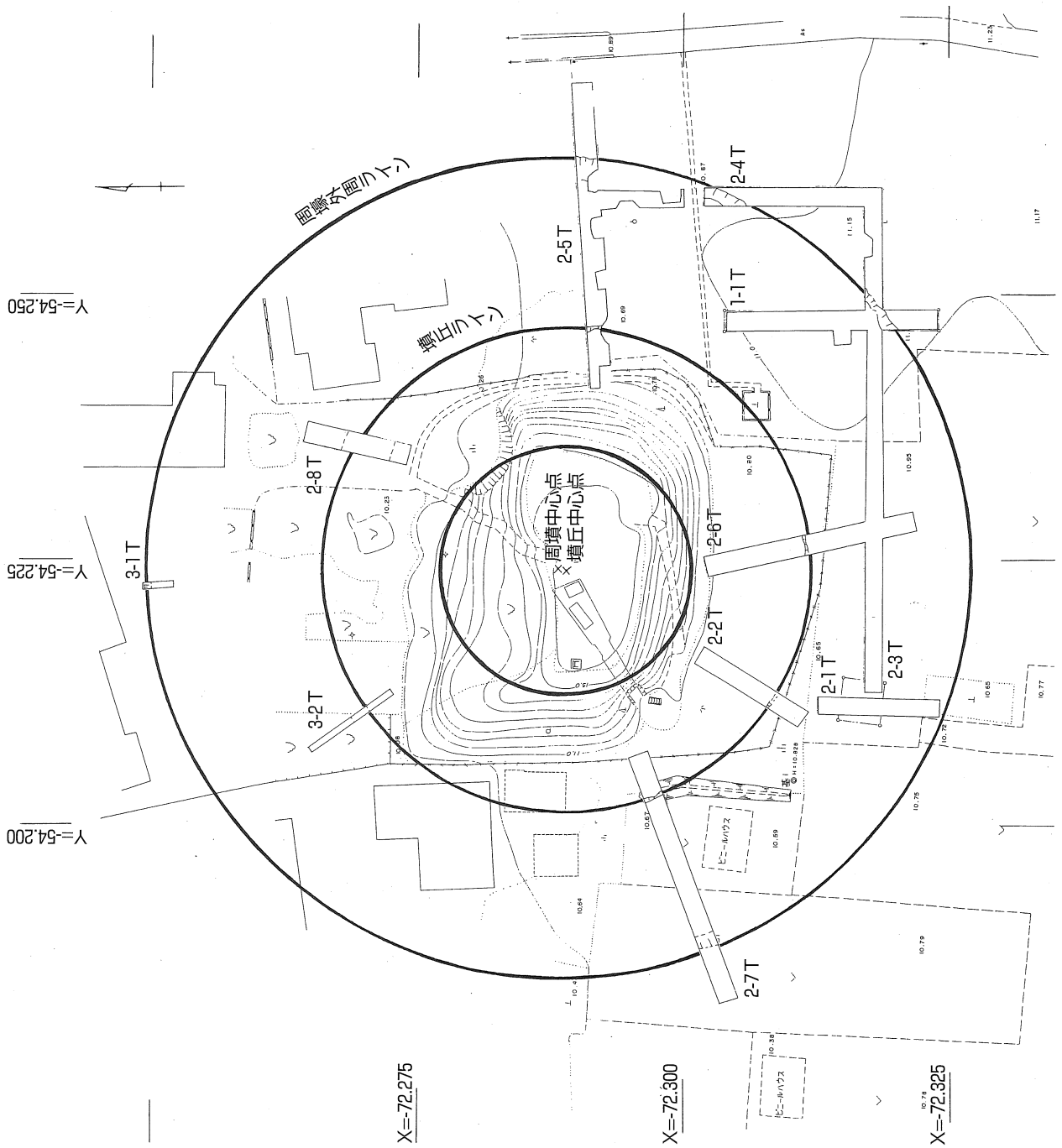
過去の調査成果も原図から再検討の上、以下のように墳丘各部の計測値を算出した。

＜墳丘＞

墳形	円墳
墳頂直径	約24m　※残丘から推定。
墳丘直径	約46m
墳丘高	約６ｍ（頂Ｌ＝15.7m、裾Ｌ＝9.4m～9.8）※石室床面は標高9.5m前後

＜周濠＞

周濠外縁直径	約77m
周濠幅	約16m
周濠肩残高	Ｌ＝10.3～10m



第４図　墳丘復元図（S=1/600）

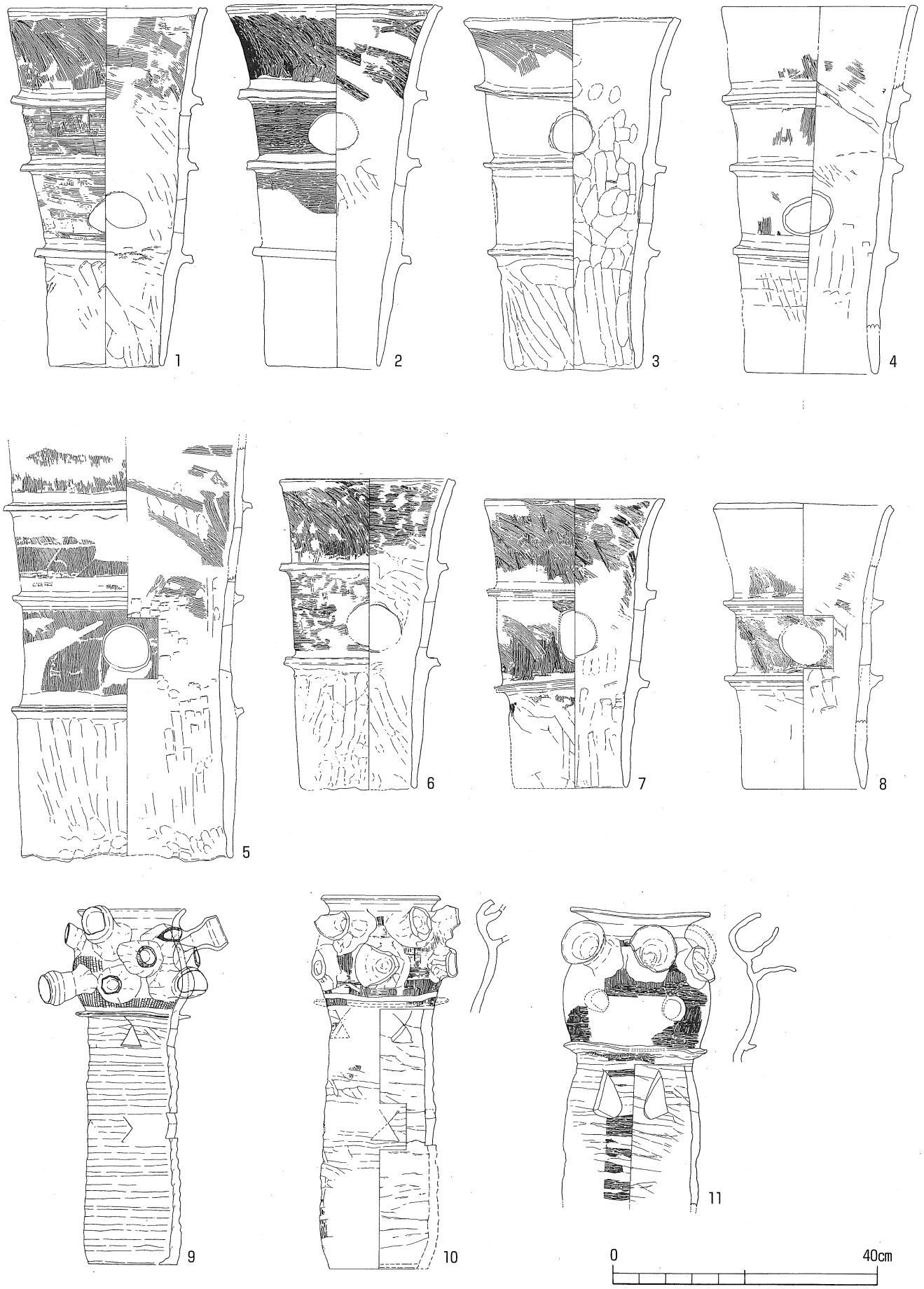
周濠底高　　L＝9.4～9.8m　※墳丘裾と同様

なお、周濠内においても２－３Ｔの西端部と２－１Ｔのほぼ全域においては例外的に標高10m前後の高さが保たれており、この範囲に墓道が存在した可能性がある。

（３）外表施設（第５図）

葺石等の痕跡については過去のいずれのトレンチからも確認されず、存在しなかったものと考えられる。

墳丘には円筒埴輪・須恵器子持壺が廻り置かれていたと考えられ、全方位の周濠内において円筒埴輪・須恵器子持壺が出土している。また、明らかに通常の円筒埴輪と異なる形状を示す埴輪片も確認されており、形象埴輪等が存在するようであるが、破片が小さくその形状は定かでない。



第５図　上塩冶墳山古墳墳丘出土物

なお、これまでに出土している円筒埴輪と須恵器子持壺の様相の概略は以下のとおりである。

＜円筒埴輪＞

円筒埴輪はタガが良く発達し、棒状もしくはヘラ状工具による底部調整を持つという統一した特長も見られるが、第５図のようにタガ条数、タガ形状、２次調整、法量等に様々な特徴的差異が見られる。

＜子持壺＞

今回の調査地点を含め、墳丘に近いトレンチでは全ての方向において須恵子持壺が確認されており、墳丘の周囲を全て取り囲むように配置されていたものと考えられる。また、須恵子持壺には現在までのところ大きく３タイプが確認される。①親壺体部全体に３段16個の子壺を配置するタイプ、②親壺体部全体に２段10個の子壺を配置するタイプ、③親壺肩部のみに６～８個子壺を配置するタイプの３タイプで、口縁の形状、子壺の形状・スカシの形状・親壺のプロポーションにもタイプ毎に特徴の差異がある。

（４）墳丘調査における今後の課題

今回の調査によって、上塩冶築山古墳における墳形・範囲の確認はほぼ終了したといってよいであろう。しかしながら、それでもなおいくつかの問題点が残されている。その問題点とは、

①今回可能性を示した周濠内墓道の形態が不明確であること。

②墳丘本体を断ち割った調査が行われておらず、構造が不明確であること。

③円筒埴輪と須恵器子持壺の原位置がわかる成果がないこと。

④石室入口～墳裾間の調査が行われておらず、前庭部の状況が全く不明確であること。

である。こうした問題点を１つ１つ解決し、国史跡「上塩冶築山古墳」の実態を解明していくことが今後の課題である。

参考文献　『上塩冶築山古墳の研究　島根県古代文化センター調査研究書４』島根県古代文化センター 1999
『上塩冶築山古墳』出雲市教育委員会 2004
『塩冶地区遺跡分布調査Ⅰ』出雲市教育委員会 1986
池田満雄「上塩冶築山古墳」『出雲市の文化財　第１集』 1956
渡邊貞幸「ガウランド氏と山陰の古墳（下）」『八雲立つ風土記の丘　№40』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1980
梅原末治「出雲に於ける特殊古墳（中ノ上）」『考古学雑誌』第９巻 第５号 1919

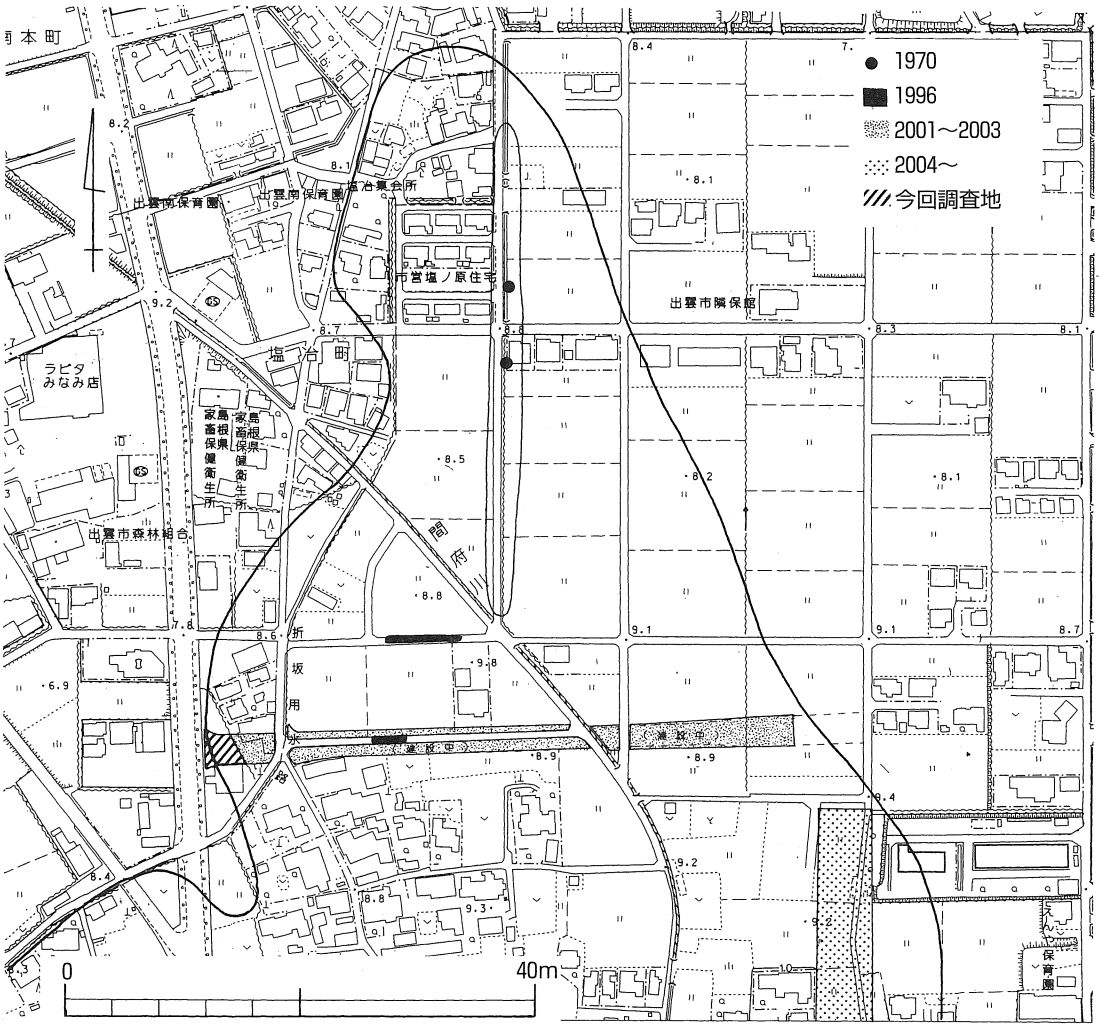
平成16年度角田遺跡発掘調査

1．調査に至る経緯

平成12年10月、出雲市都市計画課より天神一の谷線道路改良予定地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。当該事業地の一部は周知の遺跡である角田遺跡の範囲内であるとともに、平成８年度には圃場整備事業に伴った発掘調査も実施していることから発掘調査の必要があると判断した。また、試掘調査を実施し事業地内における遺跡の範囲を確認した結果、事業予定地の内約310mの区間が埋蔵文化財包蔵地と認められた。

都市計画課との協議の結果、埋蔵文化財包蔵区間について平成13年度から発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は建設事業の進捗に合わせ平成13年度、平成14年度、平成16年度の複数年度に渡って実施した。本書においてはこの内の平成16年度発掘調査部分を報告する。平成13、14年度発掘調査についてはすでに別途報告済である。



第１図　調査地位置図

２．過去の調査

角田遺跡及びその周辺部では、過去にいくつかの発掘調査が実施されている。以下にその概要と所見を示す。

1970年　出雲高等学校社会部考古班の生徒を中心に、揚松地区第３工区圃場整備事業に伴う水路工事部分について遺物採集と一部トレンチ調査が実施されている。古墳時代後期後半～終末期頃の遺物と古墳時代終末期初頭頃の土壙が確認されている。

1996年　出雲市教育委員会によって、宮松地区圃場整備事業に伴う道路工事部分について発掘調査が実施され、古代～近世を中心とした時期の遺構・遺物が確認されている。出土遺物から付近に鍛冶関連施設や古代寺院が存在した可能性も指摘されている。

2001年～　平成13・14年度に出雲市教育委員会によって天神一の谷線道路改良予定地内の発掘調査を実施している。当該調査は本書報告の調査区と同様の起因事業に伴うものである。調査区東方では中世の遺構が中心で、調査区西方では古代を中心に多様な時期の遺構が複雑に切りあって検出された。調査区最西端では弥生時代の旧河道も確認され、古墳時代前期を中心とした時期の遺物が多く堆積していた。

2004年～　「築山遺跡」の名称で出雲市教育委員会によって今市古志線都市計画街路予定地内の発掘調査を実施している。遺構の中心時期は中世であるが、遺物は弥生時代～近世までの遺構を含んでいる。詳細は今後作成予定の報告書に委ねる。

以上のような調査によって、角田遺跡の範囲は近年急速に広がりつつある。本来角田遺跡の範囲は1970年遺物採集範囲周辺のみの把握がなされていたが、遺構の分布状況や地形の形状などから、旧来当該地の別遺跡として区分して把握されてきた角田遺跡・宮松遺跡・築山遺跡の境界は認められず、これらの遺跡群が一体的な広がりを持つものであることが明らかになってきた。

３．調査の概要

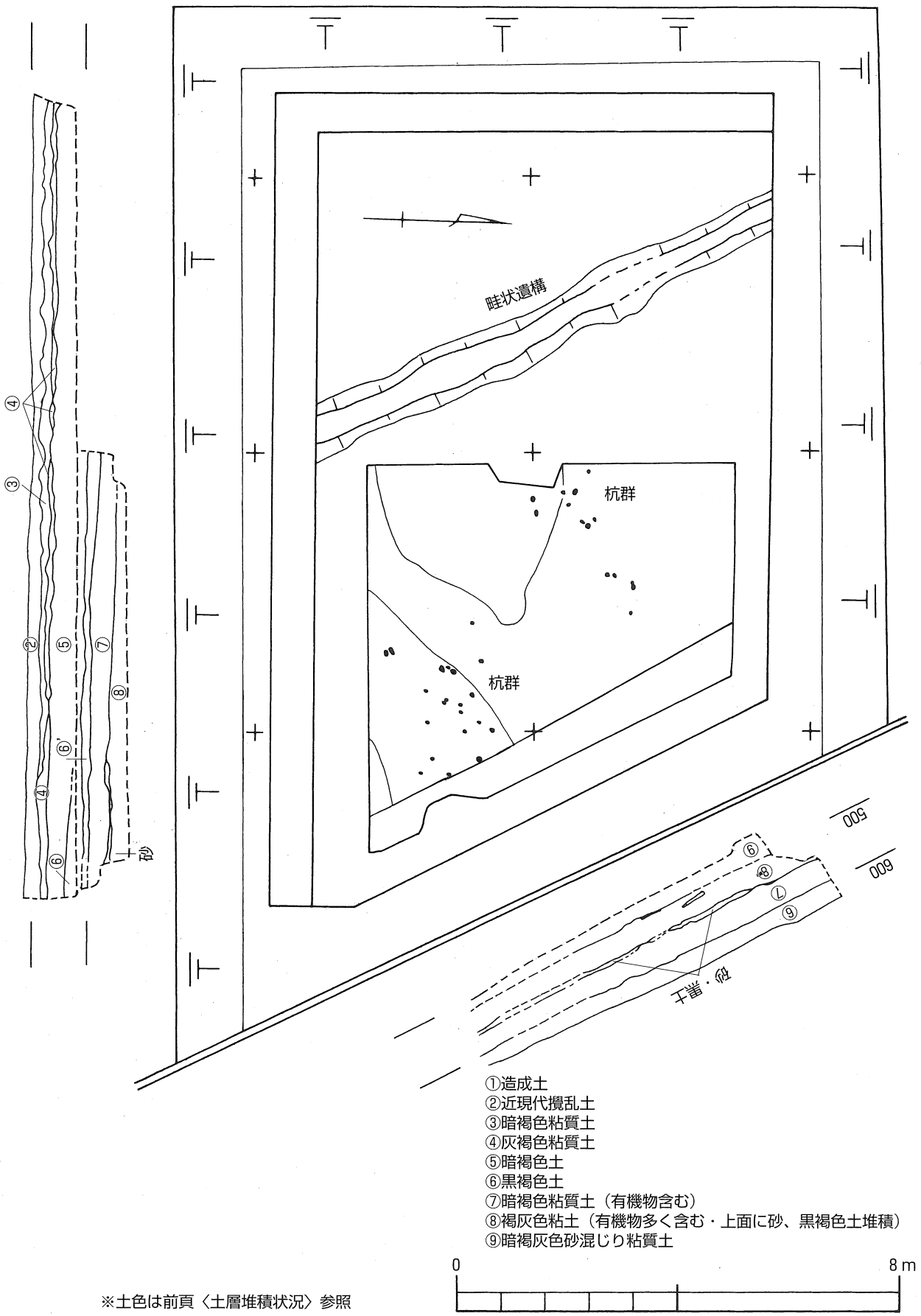
調査は地表から約1.5m、標高７m程度まで重機による表土掘削を行い、その後手堀によって徐々に掘り下げて調査を進めた。５層上面までは調査区全面調査を実施したが、側溝掘削中の遺物散布状況から調査区西方は遺跡の範囲から外れる可能性が高いと判断したため、６層以下の面的調査は調査区東半部のみを対象として調査を進めた。発掘停止面は９層上面である。

＜土層堆積状況＞

基本的な層序は上から①造成土②近現代攪乱土③暗褐色粘質土④灰褐色粘質土⑤暗褐色土⑥黒褐色土⑦暗褐色粘質土（有機物含む）⑧褐灰色粘土（有機物多く含む・上面に砂、黒褐色土堆積）⑨暗褐灰色砂混じり粘質土の順で堆積していた。

遺物の出土状況から概ね４層が近世頃、５～６層が中世頃、７層が古代～弥生時代終末頃、8層以下が弥生時代の堆積層と考えられる。

調査区全体が旧河道内の堆積地であると考えられるが、５層上面と８層上面においてはわずかに遺構も確認されている。



※土色は前頁〈土層堆積状況〉参照

第２図　遺構配置図（S=1/100）

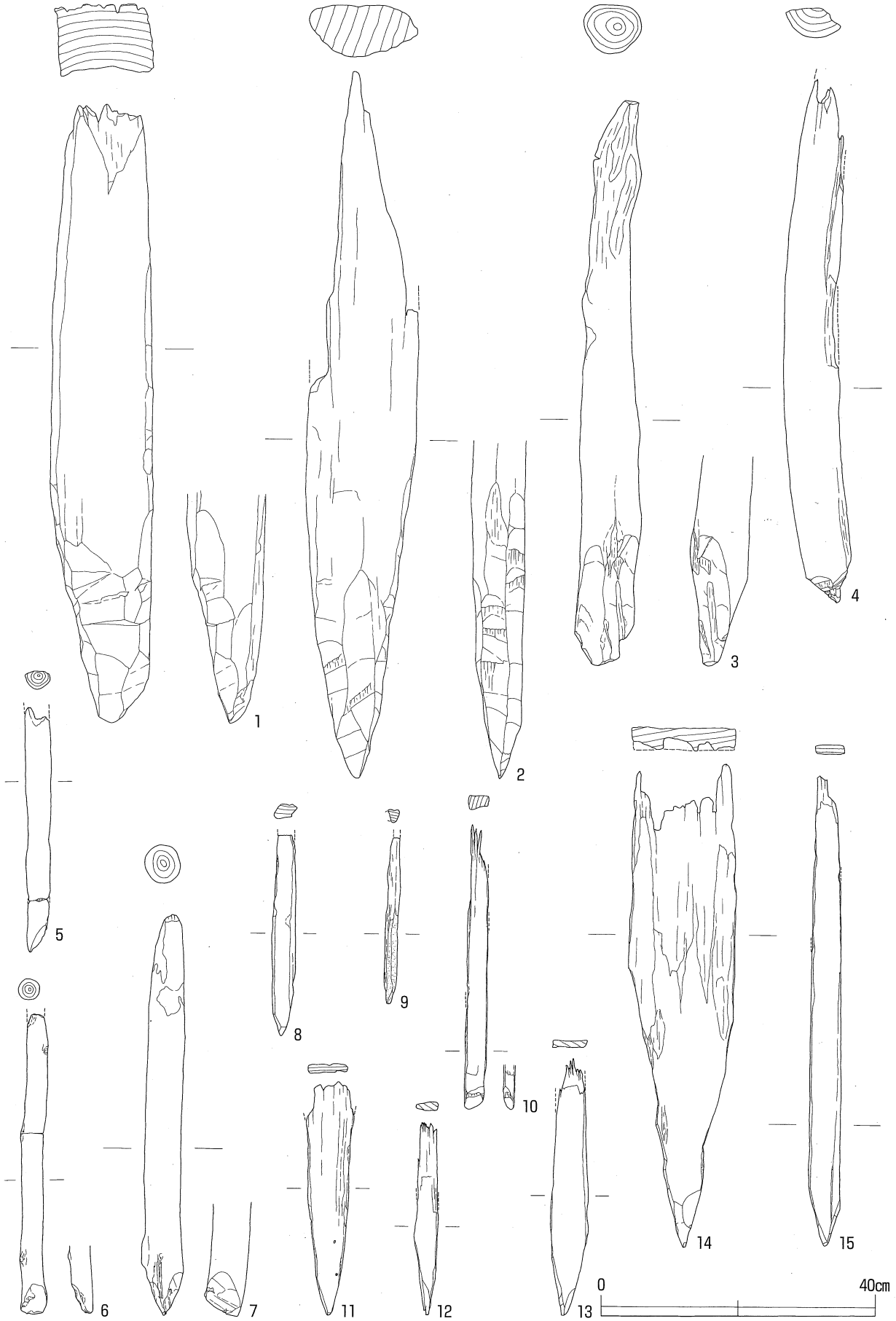
＜遺　構＞

第１遺構面（５層上面・第２図）　第１遺構面では近世の畦状遺構が1箇所確認された。調査区南西を斜めに横切る形で検出されている。高さ５～10cm、幅１ｍ～80cm、長さ10ｍ以上を測る。

第２遺構面（８層上面・第２～３図）　遺構として把握されたのは８層上面付近から打ち込まれたと杭群のみである。当該期の地形が最も低くなっている部分を挟むように南北２群確認され、南側杭群は大型材を多用しているが、配列等にそれ以上の規則性は確認できなかった。時期については直上

第３図　杭群検出状況（S=1/50）

第４図　出土杭実測図-1



第５図　出土杭実測図-2

の遺物に乏しく不明確であるが、前後の堆積土中遺物や平成14年度の隣接地調査の状況を勘案すると弥生後期～古墳時代前期頃の築造であろうと推測される。

第４～５図には杭群を形成している木杭の内代表的な形状のものを図示した。

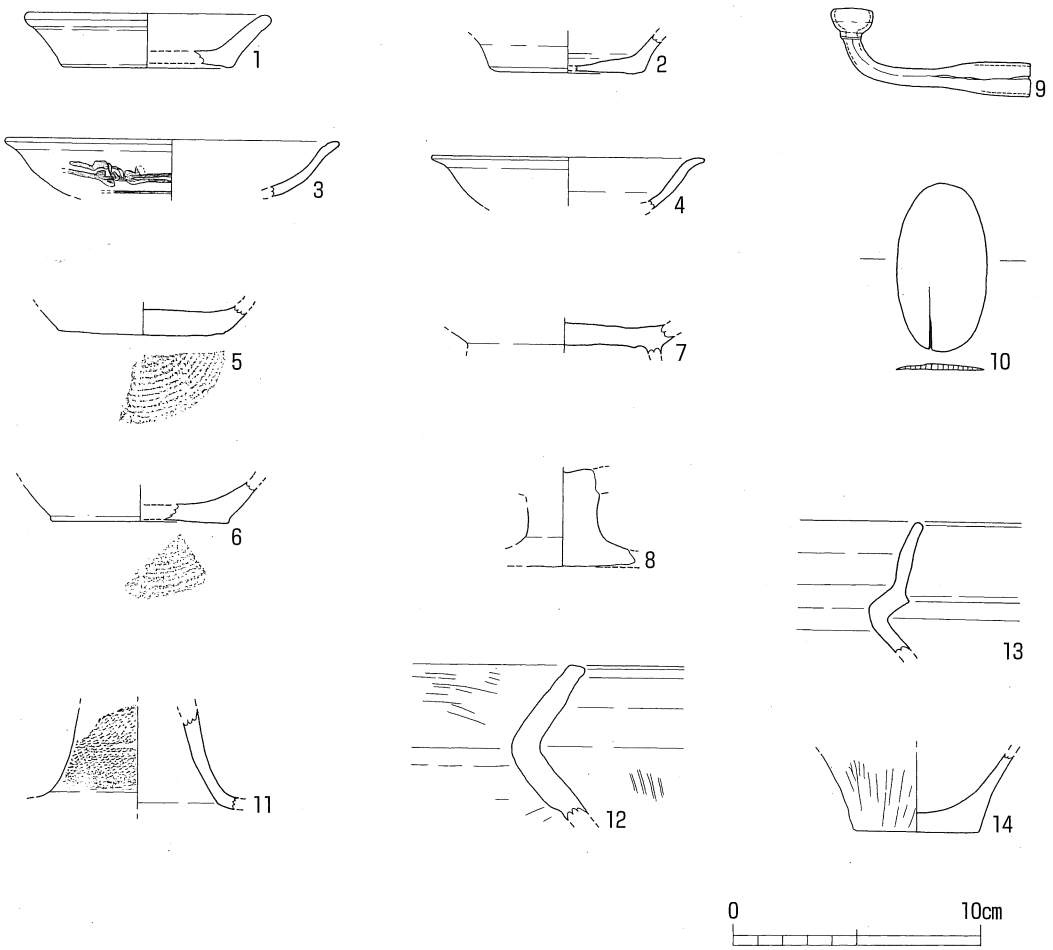
＜遺　物＞

今回の調査で出土した遺物は全て包含層出土遺物であるが、近世～古代を中心とした時期の須恵器・土師器・陶磁器・金属器・木製品、古墳時代前期～弥生時代後期頃を中心とした時期の土器・木製品などが確認されている。木製品部材以外の資料は非常に僅少で磨耗したものが多く、出土品の多くは付近からの流れ込みと推定される。

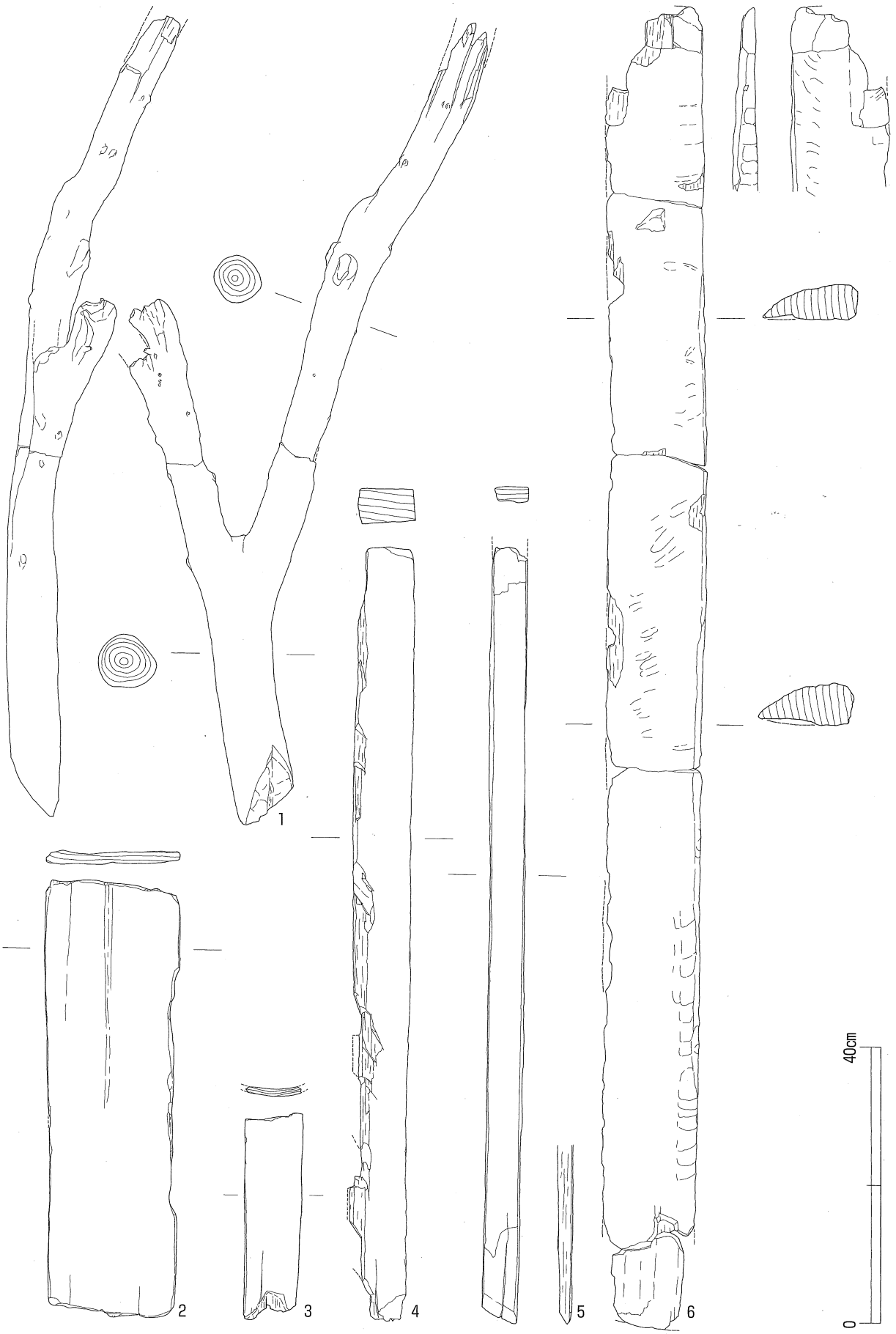
４層出土遺物には６－１、２の土師質土器、３、４の陶磁器、９の煙管などがあり、概ね近世頃の堆積土層であることがわかる。

５～６層出土遺物には６－５、６、８の中世土師器、７の緑釉陶器、10の用途不明木製品などがあり、概ね中世期頃の堆積土層であることがわかる。

７～８層出土遺物には６－11の須恵器、12の土師器、13、14の弥生土器、第７図の木製部材などがあり、概ね弥生時代後期から古代ごろの堆積土層であると推定される。この内８層出土の土器資料は14の弥生土器甕底部のみであるが、他資料が全て磨耗著しいのに比してこの資料は磨耗も少なく、比較的堆積時期に近い資料であると考えられる。また、木製部材についても、いずれも８層直上付近から８層内にかけて出土した資料であり、前述の遺構推定時期を勘案すると概ね弥生時代後期から古墳



第６図　包含層出土遺物実測図-1



第７図　包含層出土遺物実測図-2

時代前期を中心とした時期のものと推定される。

4．まとめ

今回の調査は角田遺跡の西方縁辺部における調査であり、遺物・遺構ともにわずかなものであった。しかしながら、本調査によって遺跡の状況を東西の端から端まで確認したこととなり、遺跡の全体像を整理すべき段階となったと言える。

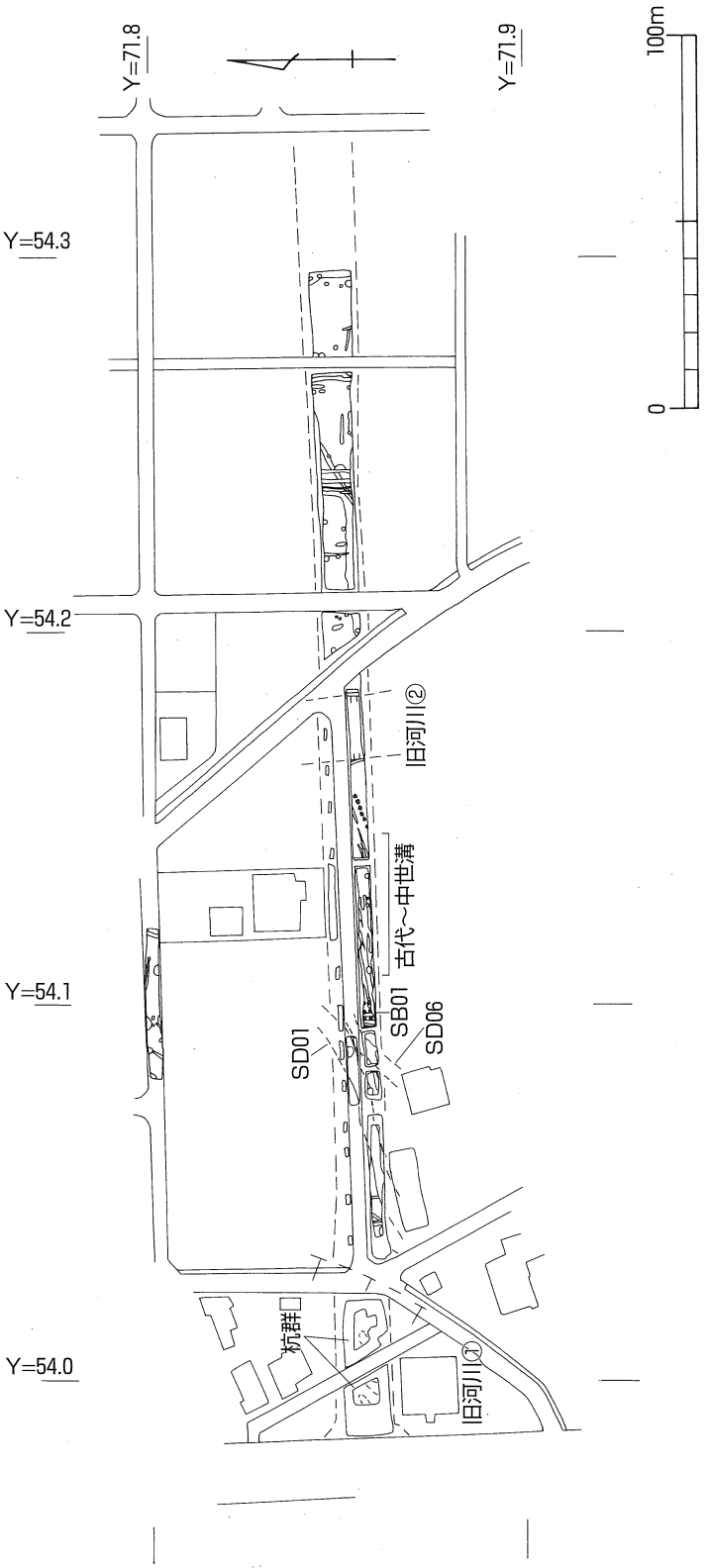
＜これまでの調査成果の整理＞

今回の調査地に連続する調査地点は平成８年度に実施した宮松地区圃場整備事業に伴う発掘調査と平成13・14年度に実施した天神一の谷線道路改良工事に伴う発掘調査がある。これらの調査で確認された主要遺構と今回の調査成果を合成したものが第８図である。

角田遺跡は弥生時代から近世まで断続的に造営される複合遺跡であるが、人々の生活の中心は古代～中世期であったと考えられる。ただし、その性格は旧河川以西とそれより東において若干様相を異にするようである。

旧河道②より東においては古代以前の遺構・遺物はほとんど確認されず、中世期を遺跡の主要な造営期として捉えられる。

一方、旧河川②以西においては中世期に加えて古代以前の遺構・遺物も顕著となる。弥生時代後期～古墳時代前期頃にはＳＤ０６や旧河川①に伴う地形落ち込み内杭群などが確認されるほか、掘立柱建物跡（ＳＢ０１）も当該期の遺構である可能性が指摘される。古代期には建物区画を含む多くの小溝



第８図　角田遺跡主要遺構配置図

状遺構のほか、ＳＤ０１のような比較的大形の溝状遺構も確認されている。

また、1970年に出雲高等学校社会部考古班の生徒を中心に近年の調査地点北方で実施された調査（第１図）では古墳時代後期後半～終末期頃の遺物と古墳時代終末期初頭頃の土壙も確認されている。

その他、付近からの流れ込み遺物と考えられる資料の中には遺跡の初現期が弥生時代前期以前まで遡る可能性を示す弥生時代前期の土器資料や、古代～中世期に付近に寺院・官衛施設等が存在した可能性を示す古瓦、製鉄施設のあった可能性を示す鉄滓・羽口などが確認されており、さらなる遺跡の多様性を示している。

＜今後の課題＞

角田遺跡は、弥生時代前期から近世まで人間の生活痕が残る比較的安定した生活空間であったと考えられるが、弥生時代中期、古墳時代中期を中心とした時期の資料はこれまでの調査では全く確認されておらず、古代に至るまではあくまで断続的な造営であったようである。こうした遺跡造営の消長を検討するにあたって、「２．過去の調査」で述べたように当遺跡と連続性を持つ一体的な遺跡と考えられる築山遺跡、宮松遺跡との総合的な整理も必要であろう。

築山遺跡については現在今市古志線都市計画街路予定地内発掘調査等が実施されており、こうした調査成果の整理を待って今後総合的に検討していきたい。

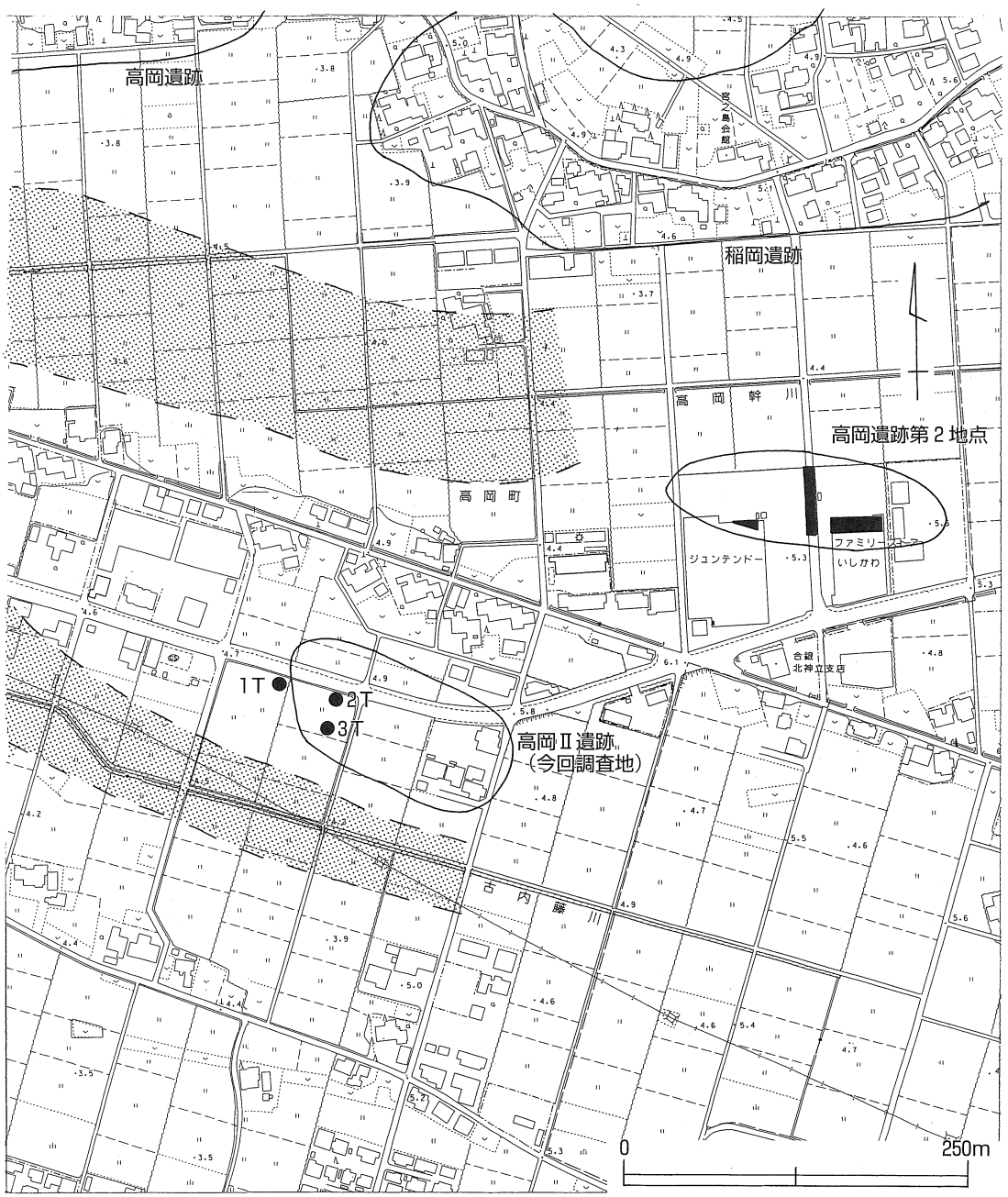
参考文献　「角田遺跡」『出雲市埋蔵文化財報告書第５集』出雲市教育委員会 1995
「角田遺跡」『出雲市埋蔵文化財報告書第８集』出雲市教育委員会 1998
『角田遺跡第３次発掘調査報告書』出雲市教育委員会 2004

高岡Ⅱ遺跡の発見

1．発見の経緯

当該地はこれまで周知の埋蔵文化財とはなっていなかったが、平成17年８月29日付で株式会社丸三より提出された店舗敷地造成工事に伴う埋蔵文化財確認調査の依頼を受けて、同年９月９日に出雲市文化財課において重機による試掘調査を実施することとなった。

調査の結果、事業地予定の一部が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたため、事業者へその旨を報告の上、10月３日付で「高岡Ⅱ遺跡」として島根県教育委員会へ遺跡発見の通知を提出した。その後当該地における開発計画は変更・中止となり、遺跡は現状保存されることとなったため、本調査は実施していない。

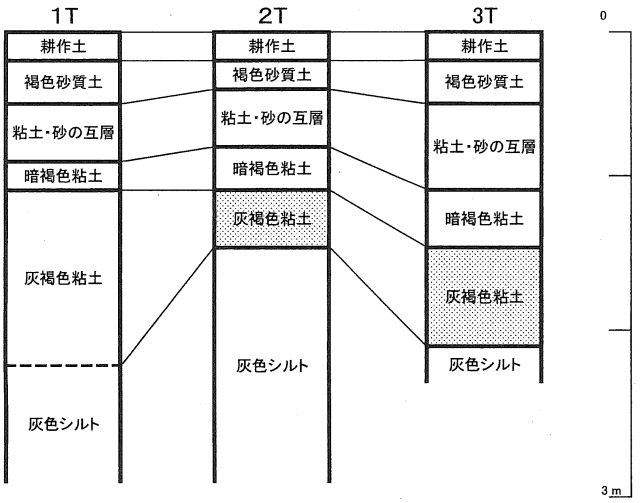


第１図　調査地位置図（S=1/5000）

2．試掘調査の概要

調査は事業予定地内に3箇所の試掘トレンチを設定し、重機によって徐々に掘削しながら遺構・遺物の有無を確認した。

調査の結果、2・3トレンチより弥生時代終末～古墳時代初頭頃を中心とする時期の多量の土器を確認したほか、2トレンチにおいては溝状遺構・ピット状遺構も確認された。基本的な層序については表土・洪水堆積土などの下に灰遺物包含層となる褐色粘土が堆積し、包含層下に堆積する灰色シルト層が遺構面となっている。



試掘トレンチ柱状図

3．遺構と遺物

遺構は2トレンチにおいて溝状遺構・ピット状遺構が確認されたが、調査段階においては別途本調査を実施することを前提としていたため図面等は作成していない。

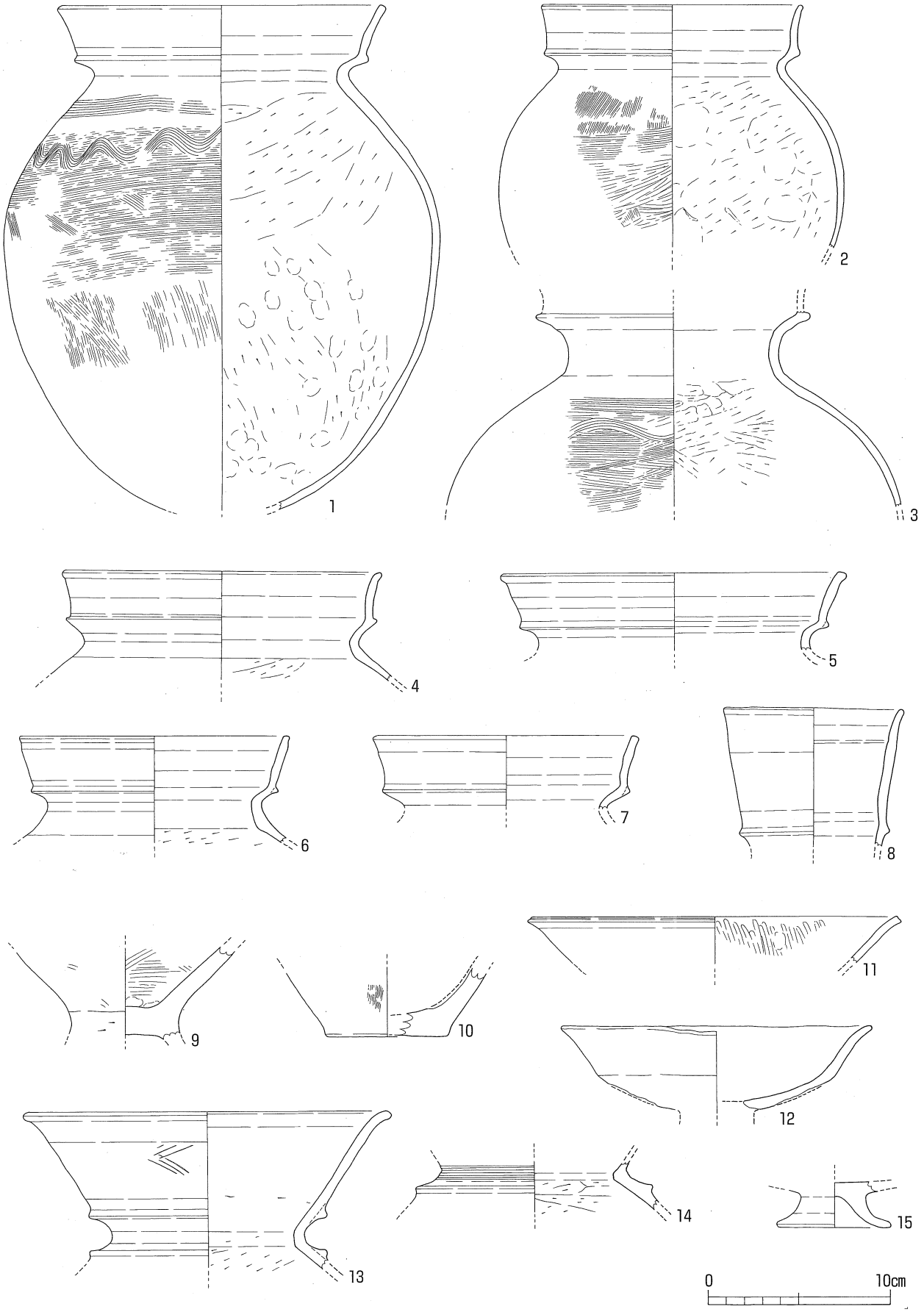
2・3トレンチともに大量の遺物が確認されたが、簡易的な確認調査であったためその全ては取り上げておらず、現地に埋め戻した資料も相当量存在すると思われる。第2図に採集試料の代表的なものを図示した。

採集資料には壺・甕（2－1～10)、高坏（2－11、12)、鼓型器台（2－13、14)、低脚坏（2－15）などがあり、その大部分は弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての資料であるが、2－9、10は弥生時代後期～中期まで遡る時期の特徴を示し、遺跡の開始時期としてはさらに遡るものと考えられる。

4．まとめ

高岡Ⅱ遺跡は今回新たに発見された遺跡であるとともに、簡易的な試掘調査のみによる確認であることから未だ不明確な点が多いが、弥生時代終末～古墳時代初頭を中心に多くの人々が生活を営んだ場であったことが推測される。遺跡の開始期は弥生時代中期頃までは遡るものであろう。

また、基盤層の高さ、遺構の分布状況から遺跡は調査地よりさらに北方・東方へ広がるものと考えられ、今回の調査地点も遺跡の縁辺部にあたる。将来的な調査の進展が期待される。



第２図　出土遺物実測図

らせん状柄巻をもつ装飾大刀

―中村１号墳出土大刀の検討から―

財団法人　元興寺文化財研究所　橋本　英将

はじめに

中村１号墳は島根県出雲市国富町に所在し、県下でも類例の少ない複室構造をもつ横穴室石室を内部主体とする(註1)。平田市教育委員会（現出雲市）による平成14年度の発掘調査で、前室の壁に立てかけられた状態で金属装大刀が出土した（原2004）。この装飾大刀は、後述するように、装飾大刀が盛行する６世紀後半から７世紀前半にかけてみられる各種装飾大刀のなかでも、目立った特長をもつものである。筆者は今回出雲市のご厚意により、この大刀（らせん状柄巻(註2)をもつ装飾大刀）を検討させていただく機会を得たので、その所見をここに紹介させていただく。

１．装飾大刀の材質と構造

全体の構成と残存状況　大刀は前室の壁面に、鞘尻側を下にして立てかけられた状態で出土した。柄巻は柄頭側端部から外れて鞘尻側に垂れ下がり、現状では柄縁(註3)側の端部のみが柄間にかろうじて固定されている。鞘間の単脚環付足金物も、同様に鞘尻側にすべり落ち、鞘尻端から28.3㎝の位置でとどまっている。柄頭の装具は失われており、柄頭の分類からの種別は不明であるが、金属製装具として、柄縁の喰出鍔、柄巻、鞘口装具、単脚環付足金物、鞘尻装具が残る。柄間、鞘間には全体に薄く木質が残るが、残存状況は良好でなく、木製装具同士の合わせは認識できない。布や漆などの有機質については、現状ではその有無を断定できない。全体の残存長は81.2㎝を測る。

材質　まず刀身および木製装具以外の、金属製外装具の材質を、蛍光X線分析の結果と肉眼での観察に基づいて報告する。蛍光X線による測定箇所は①目釘、②喰出鍔、③喰出鍔、③鞘口の筒金具、④単脚環付足金物の吊金具・責金具、⑤鞘身に錆着した装具らしき破片、⑥鞘尻の責金具、⑦鞘尻金具の７箇所についてである。

① 目釘からは銅・鉄・銀を検出した。鉄は錆に由来するものとも考えられるが、目釘全体が銅製である例は多くなく、鉄製の目釘の両端に、本来存在した柄頭装具の表面の銅が残存した可能性も考えられる。銀は目釘の頭に鍍銀や銀貼を施した可能性も考えられるが、微量であることから、銅に元来含まれていた不純物である可能性が高い。目釘本体は端部を除き木質で覆われているため、現状では鉄製・銅製両者の可能性が考えられるが、少なくとも両端部には銅が存在することが確認できる。

② 喰出鍔からは鉄・銀が検出された。錆化による亀裂を観察すると、銀製の表面の下に鉄製の地金が見え、表面の銀の端部が鍔の内側で折り返されているため、鉄地に銀貼をほどこしたものと考えられる。

③ 当初の分析では銅・鉄・ヒ素・銀が検出された。鉄は錆に由来するものと考えられる。銀については、目釘と同様に、銅の不純物である可能性が考えられたが、鞘口装具であることから、鍍銀や銀貼の可能性は捨てきれないと判断した。その後一部緑青を除去し、黒い銅錆の面と、一部

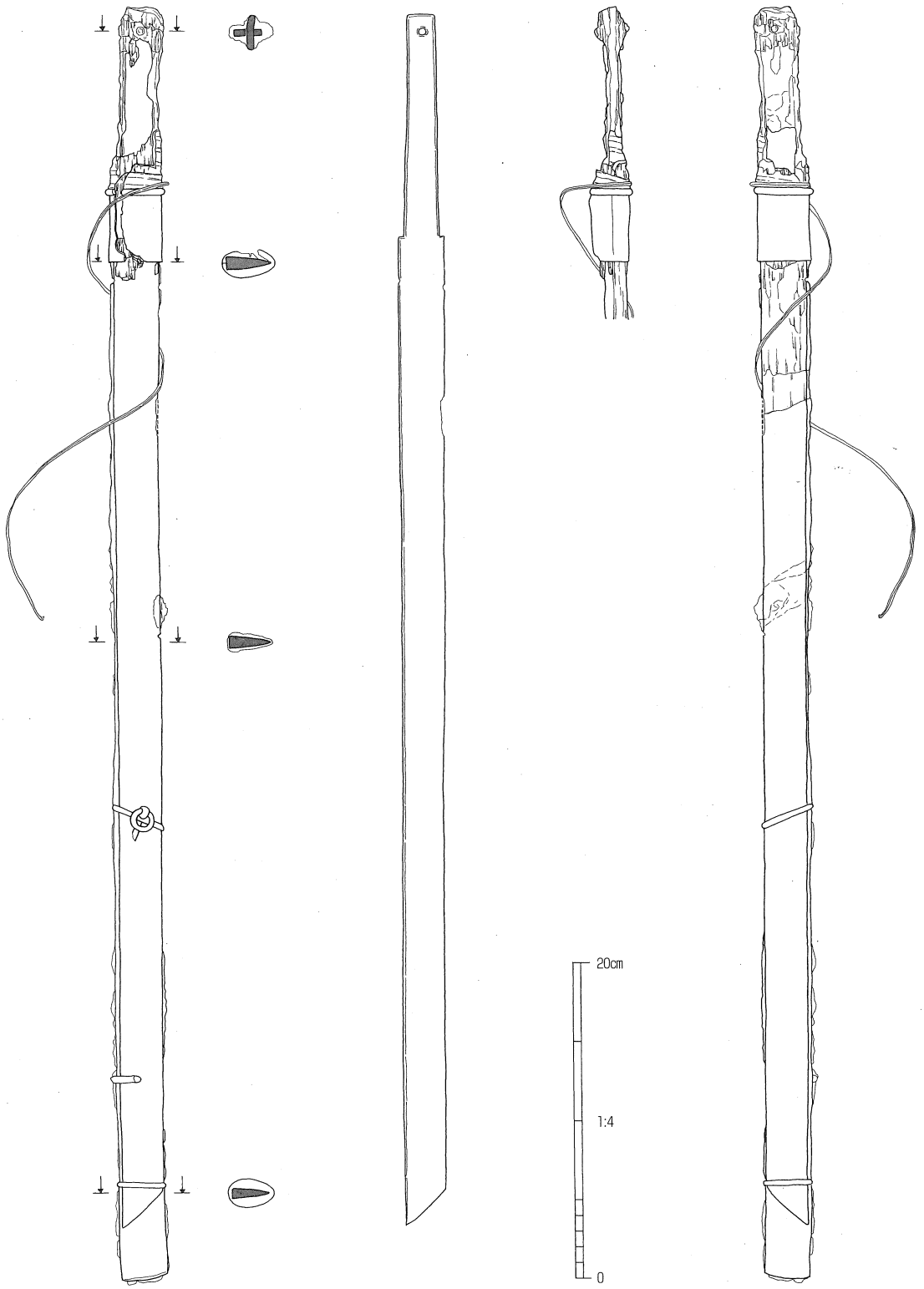


図１　中村１号墳出土装飾大刀実測図

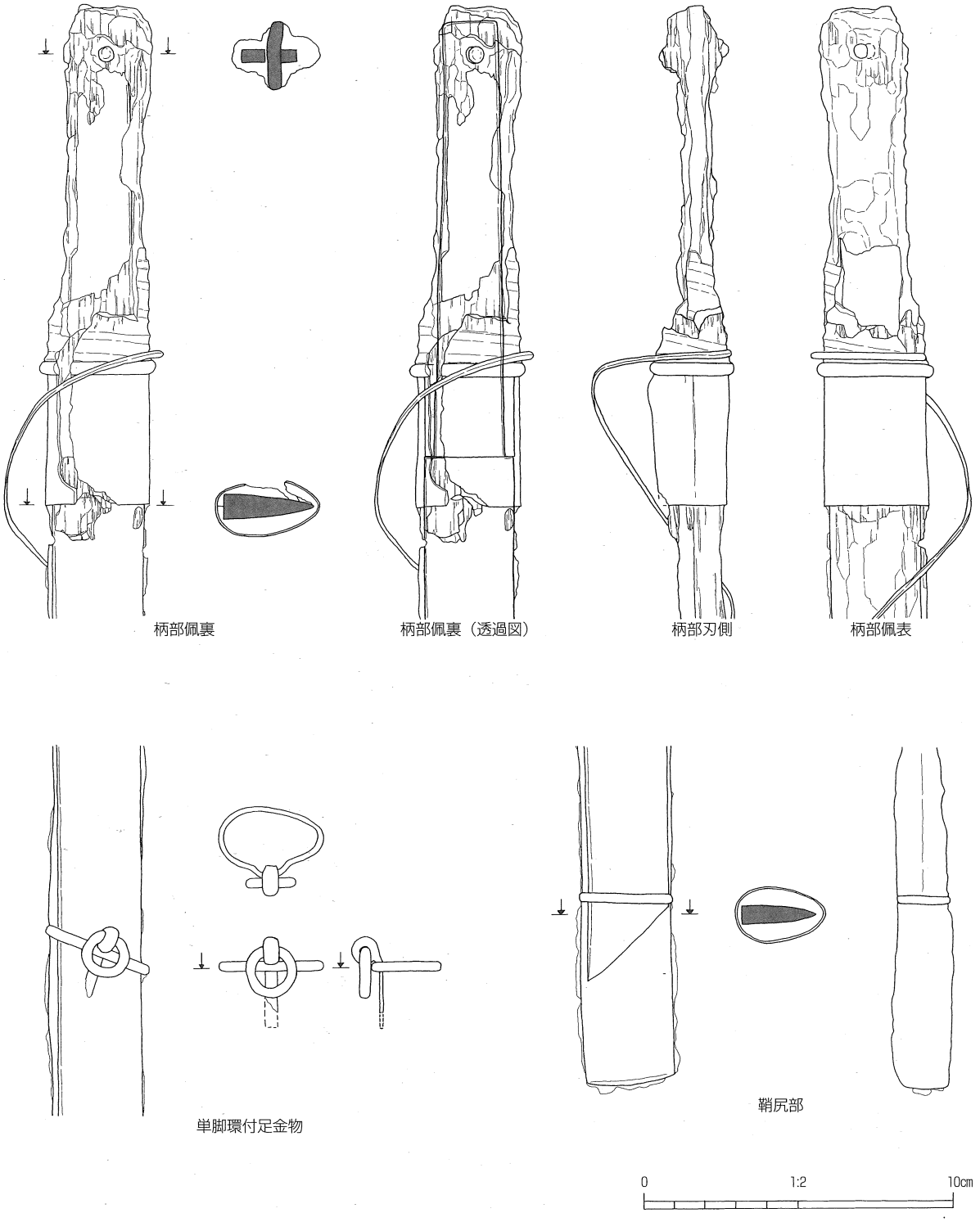


図２　中村１号墳出土装飾大刀実測図（細部）

露出した地金を再度分析したところ、結果はいずれの測定箇所でもはじめの分析と変わらず、銀は銅の不純物であり、鞘口装具に鍍銀・銀貼は施されていなかったと判断した。

④　吊金具からは金・銀・銅・鉄・水銀・ヒ素が検出された。鉄は刀身の錆に由来し、銀は微量であり不純物と判断した。水銀の存在から、銅地に鍍金を施したものと考えられる。責金具からは銀・銅・鉄・ヒ素・臭素・微量の金が検出された。こちらは裏側の観察から地金に銀色の薄板を貼り付けているのが確認でき、銅地に銀貼を施したものと判断できる。吊金具と責金具とで装飾の仕方が異なるのが特徴的である。

⑤　装具らしき破片からは、鉄・銅が検出された。鉄は刀身の錆に由来すると考えられる。銅製の責金具などの可能性が考えられるが、本来この大刀に伴うものとは断定できない。

⑥　鞘尻の責金具からは、銀・銅・鉄が検出された。鉄は錆に由来すると考えられ、肉眼の観察では、緑青が発生した地金の表面に薄い金属板を巻いたようにみえるため、銅地銀貼の可能性が高いと考えられる。

⑦　鞘尻装具からは、鉄が検出された。肉眼による観察でも、鉄製の鞘尻装具であると判断できる。

以上の結果をまとめると、装具の材質・製作技法が部位によってそれぞれことなることが指摘できる。通常装飾大刀の金属製装具は、責金具同士、筒金具同士では同じ材質・製作技法で作られる傾向があり、本例のように部位によって著しく異なる例は非常に特徴的である。

構造　刀身・茎の形状　刀身全長はエックス線写真の観察から、77.1cmを測る。刃部長63.0cm、刃部最大幅2.9cm、刃部最大厚0.8cmを測り、カマス切先に近いがわずかにふくらみをもつようである。刃部断面形は、折損部の破断面の観察から、明瞭な鎬をもたない、いわゆる切刃造である。関は直角の両関で、深さはそれぞれ0.3cmである。茎は長さ14.1cm、最大幅2.3cmを測る。茎の形態は直茎で、茎尻は一文字尻である。茎尻よりに目釘孔を一つもつ。目釘孔の径は0.5cmを測る。

柄部　前述のとおり、柄頭は失われており、柄頭による種類の特定は困難である。円頭・圭頭・方頭大刀いずれの可能性もあるが、筒金具・責金具など装具の構成からみると、圭頭大刀に類似するものが多いようである。茎尻端部に穿たれた目釘孔には両端部から銅が検出された目釘が残っている。この目釘は、目釘としての機能のみではなく、柄頭の装具を固定しつつ、端部が柄の佩表・佩裏に露出し、本来装飾的な効果をもっていた可能性が考えられる。滝瀬芳之の分類では茎目釘留式柄頭に該当する可能性が高い（滝瀬1984）。目釘の長さ2.2cm、直径0.4cmを測る。

柄間には、刻み目をもたず、断面二等辺三角形の銀線がまかれている。この銀線は、柄頭側の端部が外れ鞘尻側へ垂れ下がった状態であるが、柄付近にのこる銀線の圧痕を観察すると、約0.5cm程度の間隔をあけてらせん状にまかれていたことが確認できる。また、銀線の端部は0.2cmほど内側に折り曲げられている。これは柄頭側端部で本来存在したであろう柄頭装具の内側に銀線を挟み込み、留めるための造作と考えられる。したがって、銀線は現状の長さ約60cmが本来の長さである可能性が高い。現状でのこる部分から推定できる本来の柄の太さと柄巻きの間隔で、柄間において柄巻きの及ぶ長さを復元すると、ほぼ目釘まで１cm程度の位置までとなる。銀線の幅は平均0.2cmを測る。柄間の木質は茎の外縁に沿うように残るが、本来の形状を反映していると判断できるのは、柄縁付近の銀線の圧痕が確認できる部分のみである。茎の装着法については、確実に判断できるだけの残存状況に恵

まれなかった。ただし、背側の茎の外延にそって木質が比較的良く残る傾向が確認され、詰め材を用いる茎落とし込み技法の可能性が指摘できる。以上の状況を総合すると、柄頭は失われているものの、現在目釘の残る部分がほぼ柄頭装具の存在した位置であり、柄間は成人男性の片手一握り分程度の長さであったと考えられる。また、柄縁には鉄地銀貼の喰出鍔をもち、長径3.8cm、短径2.6cm、厚さ0.4cmを測る。X線写真の観察から鍔に接して長さ2.6cm、幅2.9cmを測る鏃の存在が確認できる。鏃の材質は不明である。

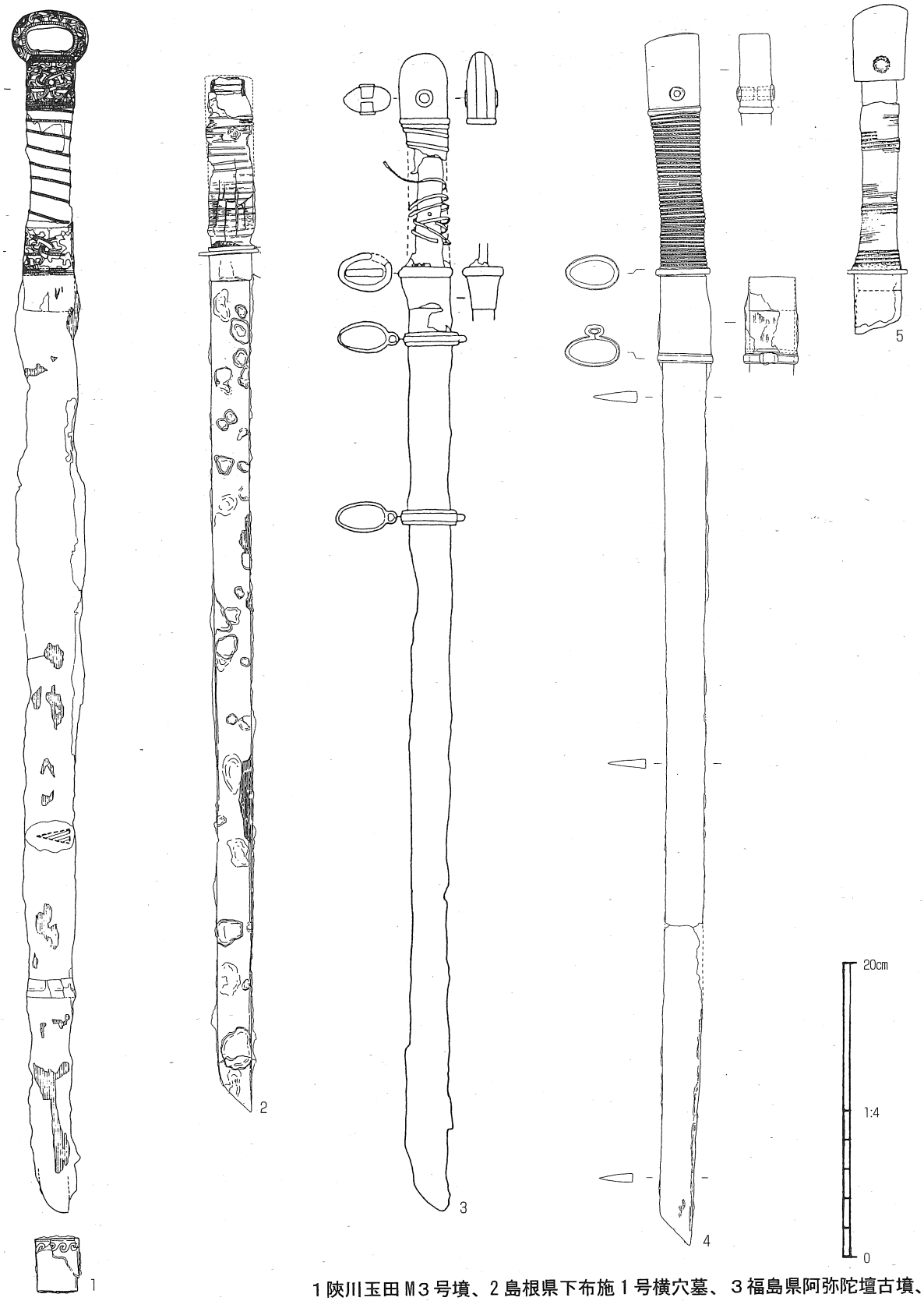
鞘部　鞘口は銅製の筒金具であり、鍍金・鍍銀は施されていない。背側にろう付けした部分が剥離した痕跡が確認できる。長さ4.2cm、長径3.4cm、短径1.7cm、厚さ約0.1cmを測る。単脚環付足金物は、本来の位置から鞘尻側へずれており、鞘尻端部から28.3cmの位置で止まっている。本来は鞘口装具に接していたものと考えられる。環は銅地鍍金、責金具は銅地銀貼である。環は外径1.7cm、内径1.1cm、太さ0.3cmを測る。責金具は断面蒲鉾型を呈し、長径3.4cm、短径2.3cm、幅0.3cmを測る。鞘尻装具は鉄製で、キャップ状に作り出され、錆化が著しく、肉眼での観察やX線写真の観察でも、ろう付けもしくは鍛接の痕跡は確認できなかった。蟹目釘はもたない。長さ6.2cm、長径3.0cm、短径1.9cmを測る。錆でふくらんでいるため、本来の法量は若干小さくなる。厚さは錆化のため不明瞭である。鞘尻装具の小口側に接する銅地銀貼の責金具は長径3.1cm、短径1.7cm、幅0.3cmを測る。鞘間全体に刀身を覆うように木質が残るが、劣化のため変形しており、現状での鞘身の外縁ラインは本来の鞘身の法量を反映していないと考える。また、鞘身表面には布や皮、漆などの有機質が本来存在したと想定できるが、その存在を確定できる情報に恵まれず、本来の鞘身表面がどのような様子であったについては判断できない。なお、年代的な位置については、石室の年代が6世紀中葉とされているが（原2004）、現状では本例が示す特徴から大刀自体の年代を絞り込むことは困難である。

2．らせん状柄巻をもつ大刀

中村1号墳出土大刀のように、柄部にらせん状の柄巻きをもつ大刀は、朝鮮半島南部、日本列島から確認されている。ここでは、代表的な類例を紹介し、その特質を抽出することで、中村1号墳出土金銅装大刀の位置づけを考えるための基礎情報を整理したい。

朝鮮半島南部出土例　朝鮮半島南部から出土した主なものとしては、連山表井里出土素環頭大刀、公州武寧王陵出土円頭刀子、慶州金冠塚出土、慶州金鈴塚出土円頭刀子、皇吾里出土球頭刀子、梁山夫婦塚出土母子円頭刀子、陜川玉田M3号墳出土龍文装素環頭大刀、などが上げられる。柄頭の種別でみると、龍文素環頭大刀、素環頭大刀、三累環頭大刀、円頭刀子（球頭刀子）、など、柄頭の種別による偏りは見られない。若干円頭刀子に多いようであるが、各種装飾大刀に採用されているのがわかる。また、分布の面でも百済領域（表井里）・新羅領域（金冠塚古墳・夫婦塚）・伽耶領域（玉田M3号墳）の3地域にまたがり、偏在する様子はない。時期については、おおむね5世紀第4四半期から6世紀第1四半期に位置づけられる。柄巻自体の特徴については、後述する日本列島出土例とくらべて、らせん状柄巻の間隔が比較的広い例が多いことがあげられる。

日本列島出土例　日本列島で出土した主なものとしては、本例のほかに、群馬県八幡観音塚古墳出土圭頭大刀、千葉県金鈴塚古墳出土圭頭大刀、埼玉県吉見かぶと塚古墳出土圭頭大刀、東京都岡本町



1陝川玉田M3号墳、2島根県下布施1号横穴墓、3福島県阿弥陀壇古墳、
4群馬県八幡観音塚、5千葉県金鈴塚

図3　らせん状柄巻をもつ装飾大刀（S＝¼）

横穴出土円頭大刀、岡山県穴が迩古墳出土銀装円頭大刀、島根県下布施１号墓出土金銅装大刀などがあげられる。現段階での集成作業が不十分なこともあり、少ない類例からの判断であるが、円頭もしくは圭頭・方頭大刀である可能性のあるものに限られるのが特徴的である。分布については、絶対数が少ないため評価が難しいが、少なくとも現状では偏在するとは即断できない。時期については、滝瀬芳之の編年ではⅢ式にあたり、穴が迩古墳出土例をのぞいては広く見積もっても６世紀第３四半期から７世紀第１四半期に位置づけられる。また、朝鮮半島の事例と比較すると、穴が迩古墳出土例以外はらせん状柄巻の間隔が比較的狭いものとなることが指摘できる。

らせん状柄巻をもつ大刀の特質　朝鮮半島南部、日本列島出土例を概観してみると、比較的際立った相違点が確認できる。まず、朝鮮半島出土例では柄頭の種類に偏りが見られないのにたいして、日本列島出土例では円頭大刀もしくは圭頭大刀にほぼ限られること、朝鮮半島南部出土例ではらせん状柄巻の間隔が比較的広く、日本列島出土例では間隔が比較的狭いこと、朝鮮半島南部出土例が５世紀第４四半期から６世紀第１四半期に年代の求められるものが多いのに対し、日本列島出土例は６世紀第３四半期から7世紀第１四半期に位置づけられる例が多いこと、などである。このように、らせん状柄巻といっても、朝鮮半島南部で確認されるものと、日本列島で確認されるものとのあいだには、時間的、デザイン的に大きな隔たりあり、日本列島で出土している例の祖形を直接朝鮮半島に求めるのは難しい。この点で注意しなければならないのは、岡山県穴が迩古墳出土例である。この古墳は現在おおむね６世紀前半と推定され、公表された遺物写真（岡山県2005）を確認した限りでは他の日本列島出土例にくらべてらせん状柄巻の間隔が広く、朝鮮半島出土例に近しい編年的位置とデザインを持つものであることがわかる。穴が迩古墳例は現在整理中とのことで、その正確な位置づけは将来的な課題となるが、朝鮮半島からの舶載品である可能性が高いと考えられる。そのほかの事例についてみると、いずれも日本列島内での装飾大刀製作技術の範疇で理解できる事例であり、列島内での製作であると理解して問題ないと考える。したがって、朝鮮半島南部出土例と、穴が迩古墳例以外の日本列島出土例との間には、直接的な関係は存在しないと考えるのが現状では妥当な評価であると考える。また、柄巻の間隔についても、間隔の広い朝鮮半島南部出土例では、柄を握るための滑り止めなどの利便性よりも、装飾的な効果に重きを置いたと考えられ、間隔の狭い日本列島出土例については、柄を握るための装置としての柄巻という発想に重きをおきつつ、その規範内で装飾性をもとめた結果のデザインと評価でき、最終的なデザインの類似性はみとめられるものの、根底にある発想において異なることが想定でき、上記の判断の証左となりうると考える。ただし、穴が迩古墳出土例のような舶載品の可能性の高い事例が存在することから、らせん状の柄巻というイメージ自体は、朝鮮半島南部からの舶載品を通して持ち込まれ、それが列島内の大刀製作工人に直接的な技術移転ではなくデザインとして導入された可能性は十分にあると考える。朝鮮半島南部出土例と日本列島出土例の間にある差異を埋める資料が極めて少ない現状では、以上の評価が妥当なものと考える。

３．中村１号墳出土大刀の意義

以上の検討をもとに、中村１号墳出土大刀の位置づけを考えると、本例は、日本列島の装飾大刀製作技法の系譜の延長上に位置づけられる列島製大刀であり、らせん状の柄巻については、円頭大刀、

圭頭大刀、方頭大刀などにみられるデザインのバリエーションの一つであると評価できる。朝鮮半島との直接的な交流等を反映するものではない。ただし、本例は金属製装具の材質および製作技法が部位ごとに異なるという通有の日本列島製装飾大刀には見られない特徴をもっており、列島製装飾大刀の技術系譜内で理解可能であるものの、製作の背景については、補修や地方生産などイレギュラーな要素を想定する必要があると考える。松尾充晶が下布施1号横穴墓出土大刀について、その特徴から地方生産も含めた特別な生産体制を想定し、配布・入手経路についても単純に畿内政権との関係だけでは捉えられないとした評価（松尾2002）は、本例にとっても非常に示唆に富むものである。類例の少ない現状ではこうした地域単位の動向に具体的に踏み込むことは難しいが、今後注目しておくべき検討課題である。

【註】

（註１）複室構造の横穴式石室は島根県下で２例のみ確認されており、中村１号墳のほかには出雲市大念寺古墳の例がしられている。

（註２）厳密にはほぼ全ての柄巻はらせん状に巻かれているため、この名称は適当でないが、間隔をあけてある柄巻を説明の便宜上このように呼称する。あくまで仮の名称であることを明記しておく。

（註３）松尾は美術刀剣の用語を検討し、柄縁を柄間の柄頭側端部、柄元を鞘尻側端部として記述している（松尾2002など）。古代以前の刀剣についての部分名称は確かに一部混乱しており、名称の整理は重要な課題である。本稿では、装飾大刀研究のなかでこれまで一般的だった名称をもちい、柄間の鞘尻側端部を柄縁と呼称しておくが、松尾による用語の整理を否定しているわけではなく、自らにいまだ用語の再検討の準備がないため、便宜上この名称を用いていることを付言しておく。

【主要参考文献】

岡山県古代吉備文化センター編2005『所報吉備』39　岡山県古代吉備文化センター
慶尚大学校博物館編1990『陜川玉田古墳群Ⅱ　Ｍ３号墳』
桜井清彦・大川清1959「東京都世田谷区岡本町横穴古墳調査報告」『古代』第32号　早稲田大学考古学会
滝瀬芳之1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHARANX古墳文化研究会
原　俊二2004『中村1号墳』平田市埋蔵文化財調査報告書　第12集　島根県平田市教育委員会
松尾充晶2002「装飾付大刀」『下布施横穴墓群・案久寺遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書４　木次町教育委員会
李漢祥2004「三国時代環頭大刀の製作と所有方式」『韓国古代史研究』36
李漢祥2003「５～６世紀百済・新羅・加耶墳墓の交叉編年研究」『國史館論叢』第101輯　國史編纂委員会

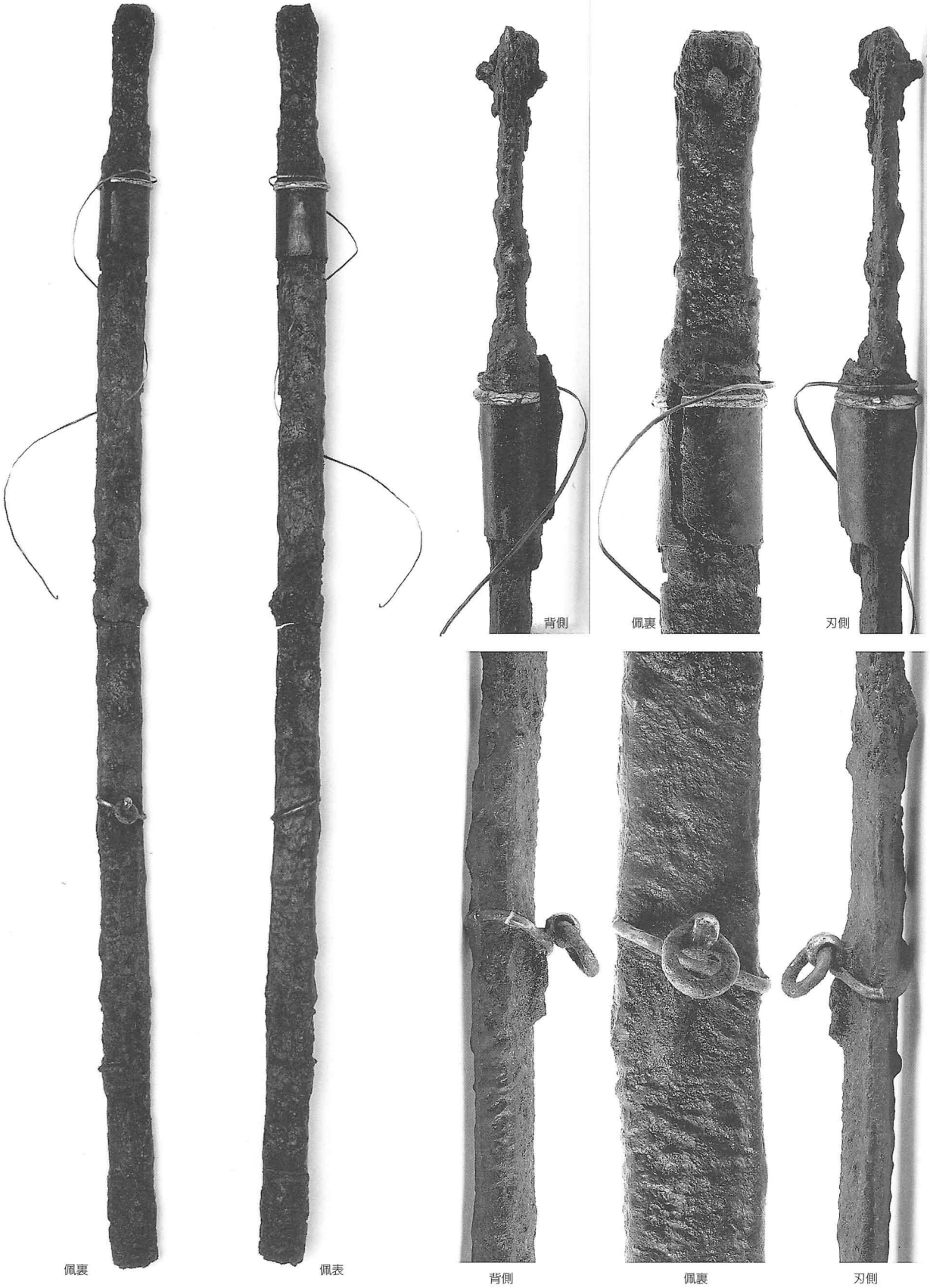


写真１　中村１号墳出土装飾大刀

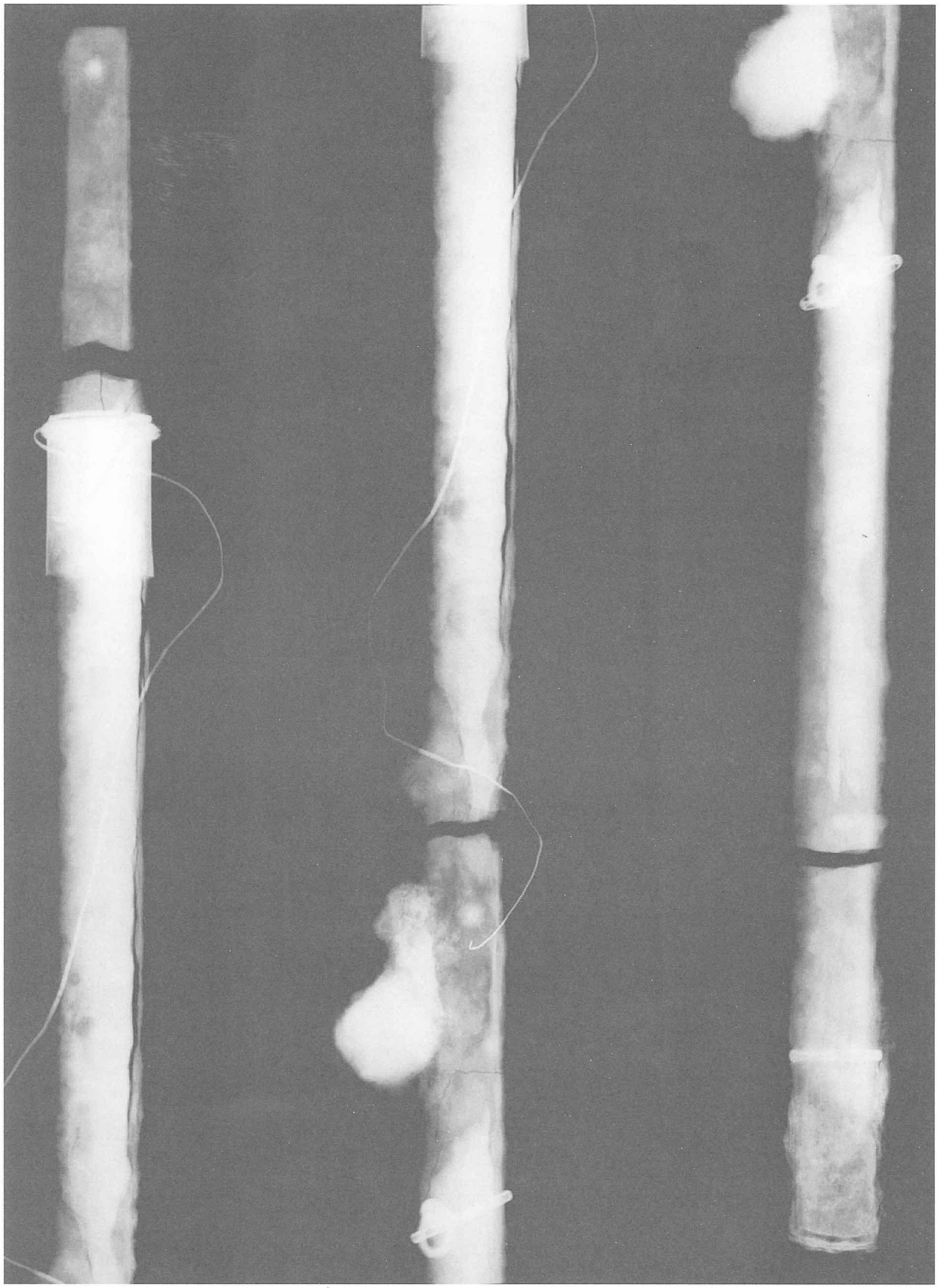
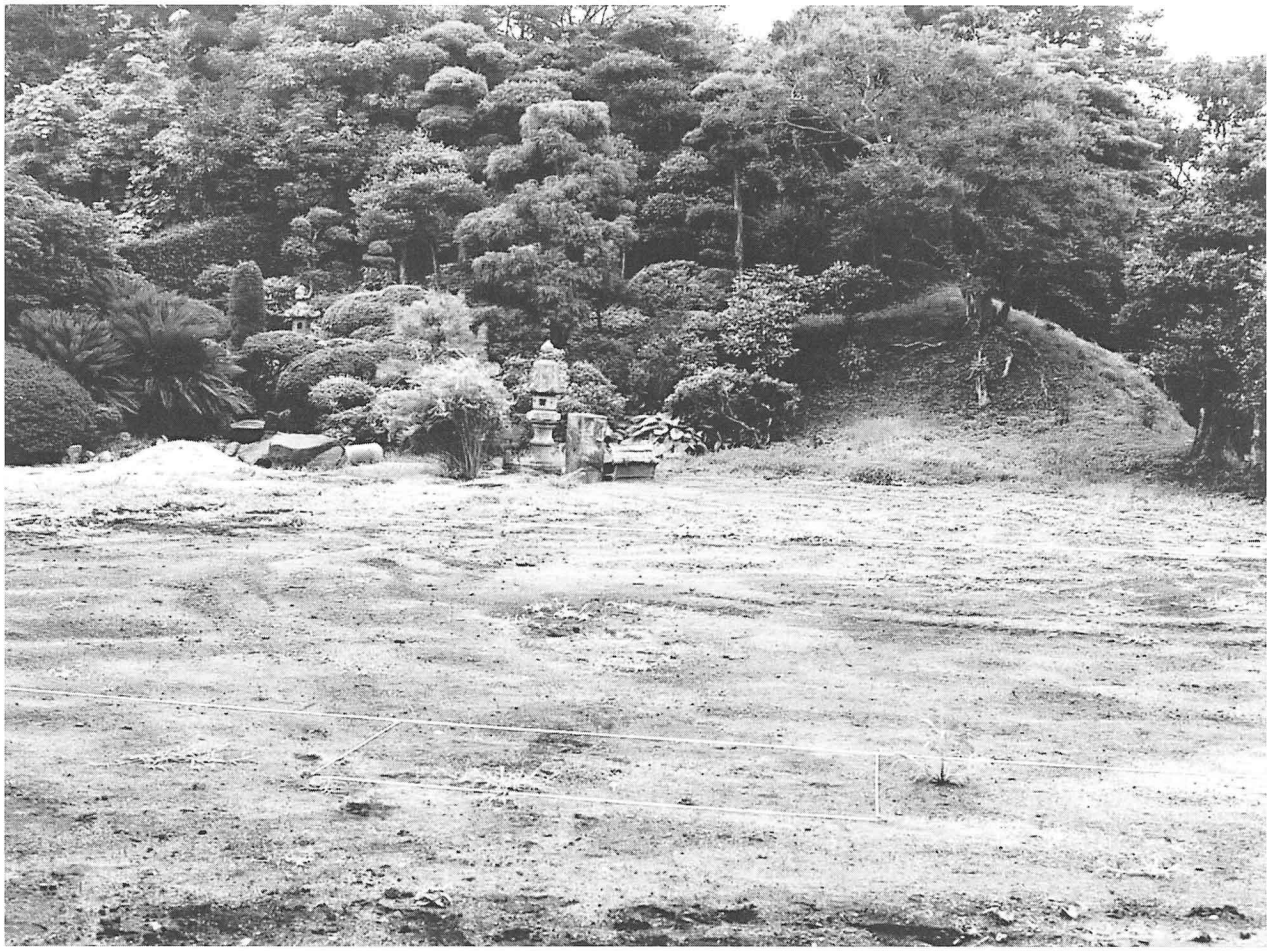
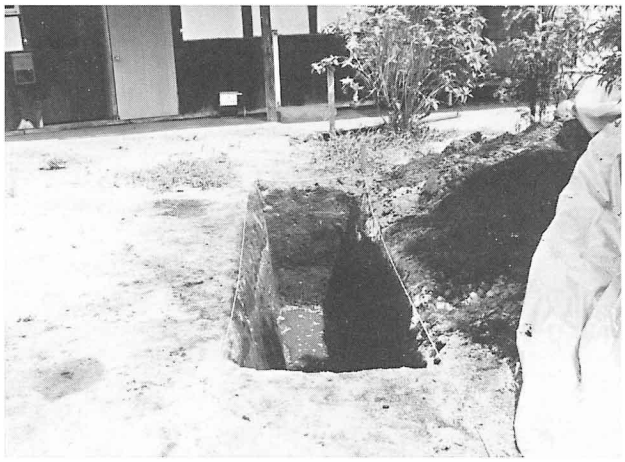


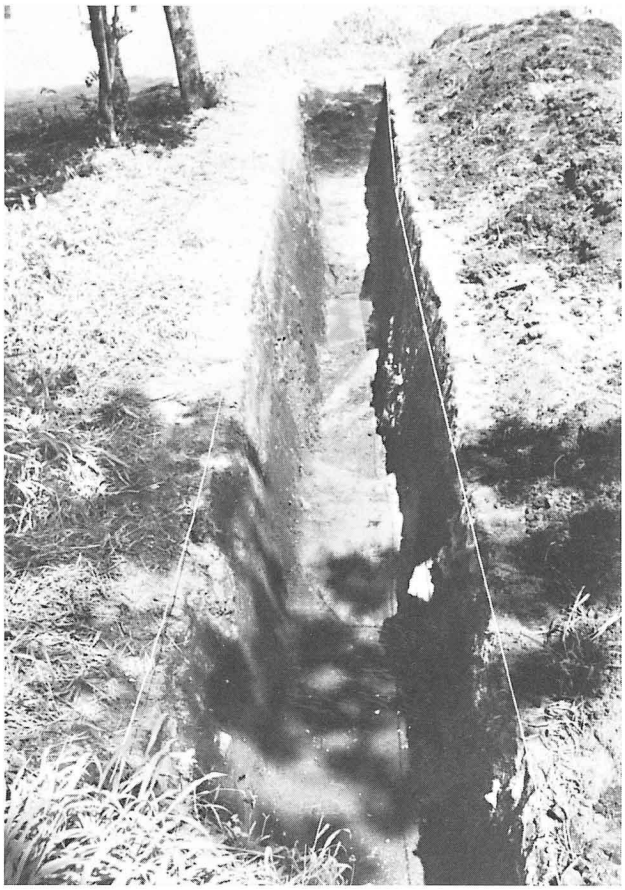
写真２　中村１号墳出土装飾太刀Ｘ線写真



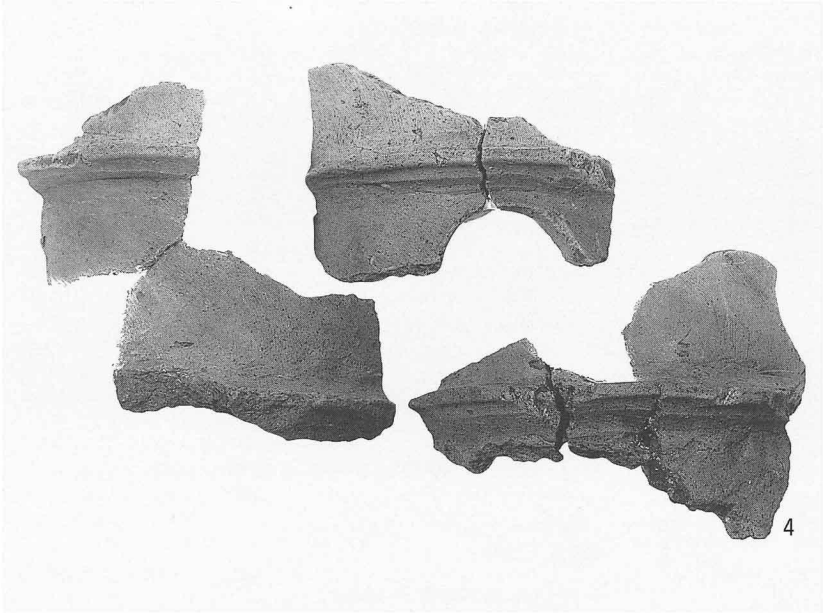
調査前

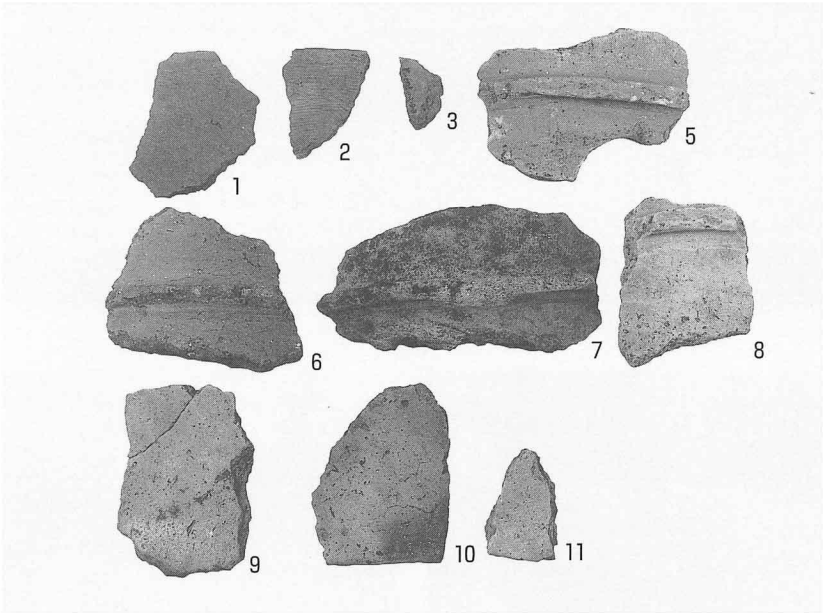


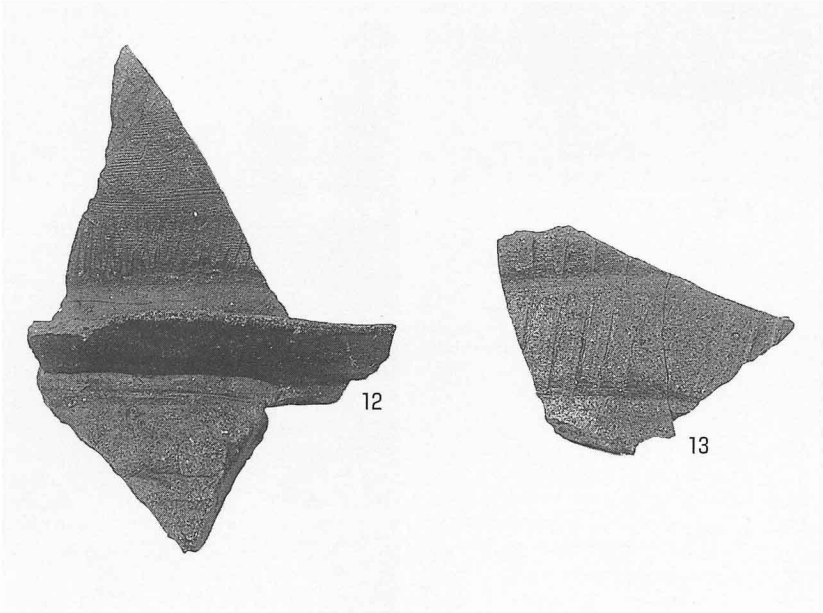
1 T

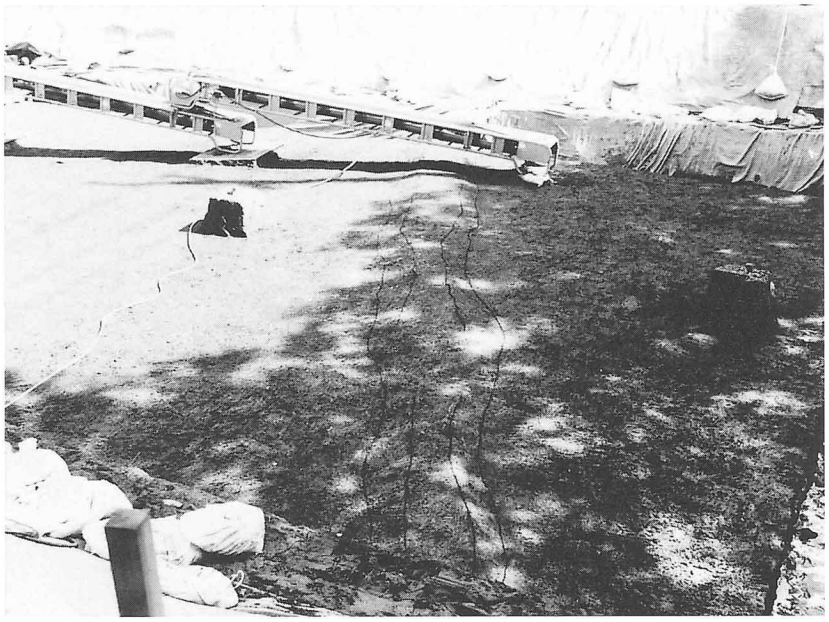


2 T

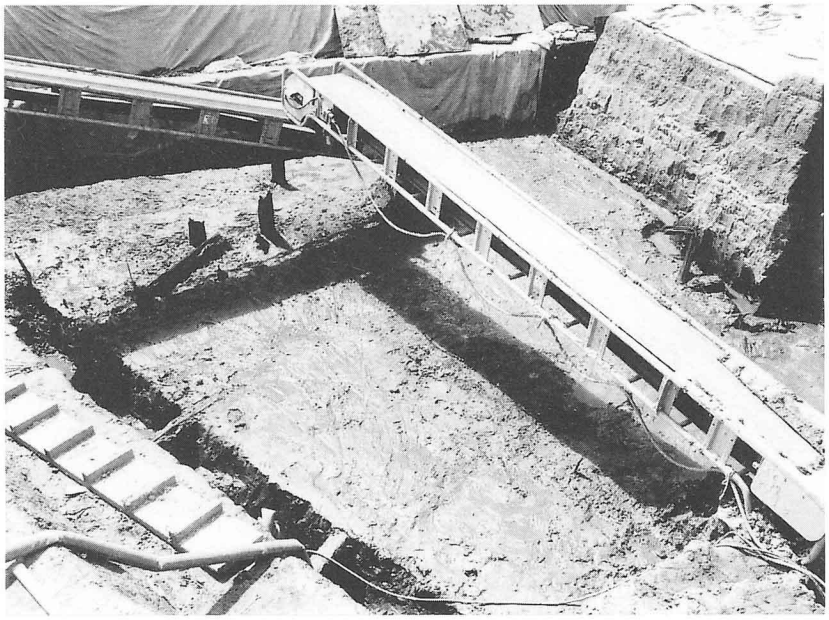

4


1
2
3
5
6
7
8
9
10
11


12
13

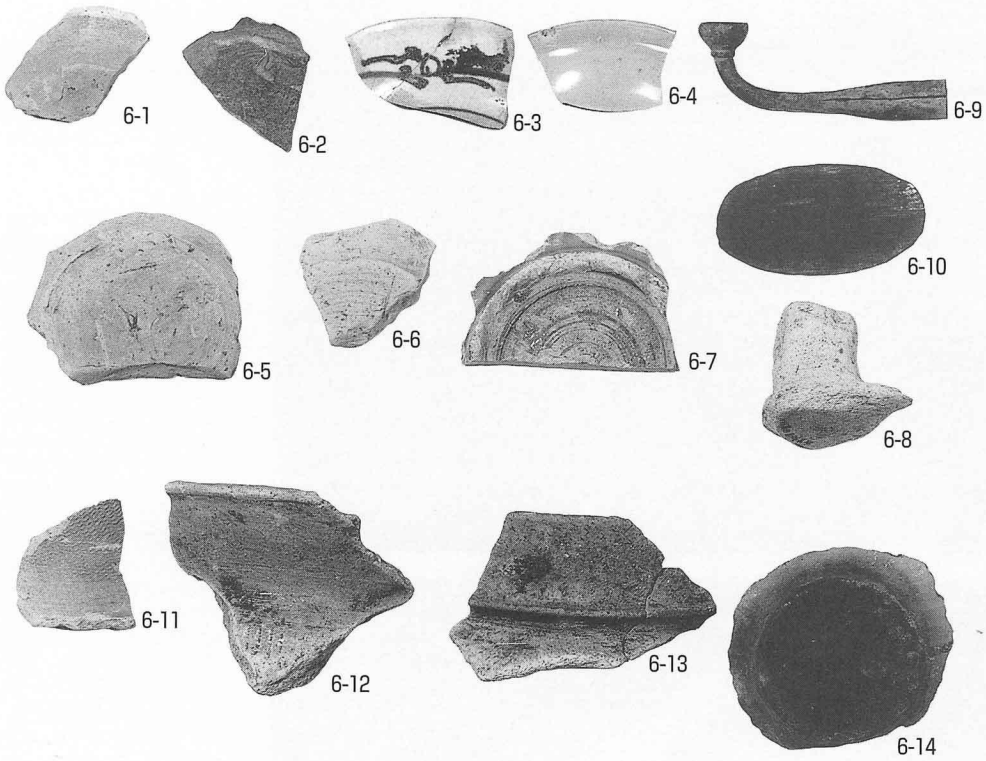


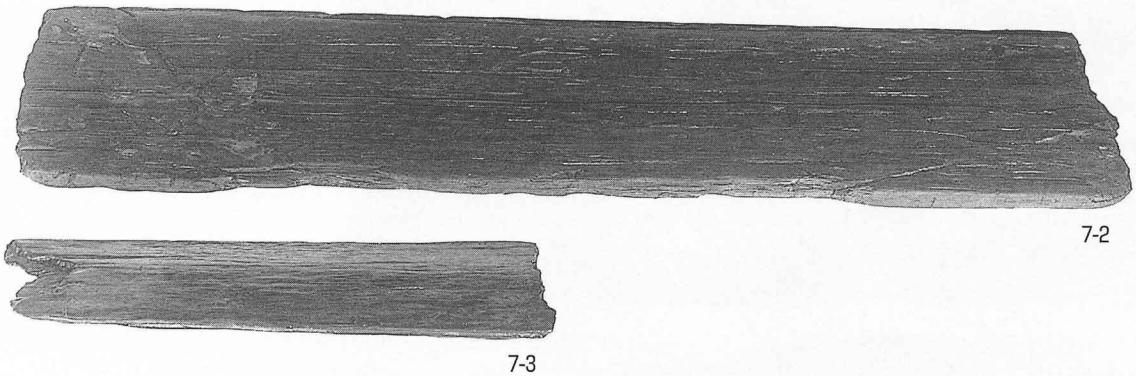
畦状遺構

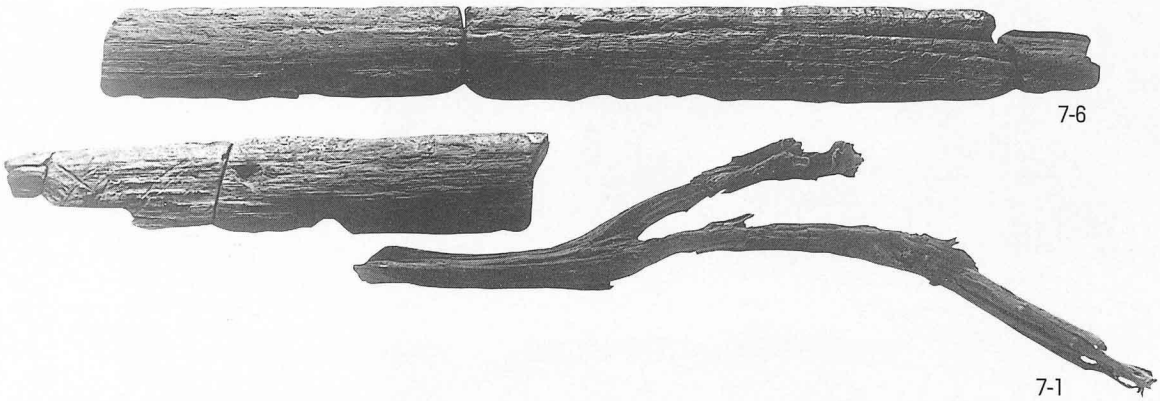


杭群検出状況

木材出土状況


6-1
6-2
6-3
6-4
6-9
6-10
6-5
6-6
6-7
6-8
6-11
6-12
6-13
6-14


7-2
7-3


7-6
7-1

報告書抄録

フリガナ	イズモシマイゾウブンカザイハックツチョウサホウコクショ　１６
書名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書　第１６集
副書名	上塩冶築山古墳　角田遺跡　高岡Ⅱ遺跡　中村１号墳出土装飾大刀
巻次	１６
シリーズ名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	１６
編集者名	須賀照隆
発行機関	出雲市教育委員会
所在地	〒６９３－８５３１　島根県出雲市今市町１０９番地１
発行年月日	平成１８年３月３１日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
カミエンヤツキヤマコフン 上塩冶築山古墳	シマネケン　イズモシ　カミエンヤチョウ 島根県出雲市上塩冶町	322032	W22	35° 20′ 48″	132° 45′ 48″	20050805 －20050809	20m²	範囲確認
ツノデンイセキ 角田遺跡	シマネケン　イズモシ　カミエンヤチョウ 島根県出雲市上塩冶町	322032	W115	35° 21′ 00″	132° 45′ 40″	20040818 －20040928	260m²	道路建設
タカオカ２イセキ 高岡Ⅱ遺跡	シマネケン　イズモシ　タカオカチョウ 島根県出雲市高岡町	322032	—	35° 22′ 50″	132° 45′ 50″	20050909	—	試掘
ナカムラ１ゴウフン 中村１号墳	シマネケン　イズモシ　クンドミチョウ 島根県出雲市国富町	322032	X255	—	—	—	—	—

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上塩冶築山古墳	古墳	古墳時代	周濠	円筒埴輪、子持壺	墳丘範囲確認
角田遺跡	集落・散布地	弥生時代～近世	杭群	弥生土器、土師器、陶磁器、木製品	
高岡Ⅱ遺跡	集落・散布地	弥生時代～古墳時代	溝状遺構 ピット状遺構	弥生土器、土師器	新発見
中村１号墳	古墳	古墳時代	－	装飾大刀	資料分析

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書　第16集

上塩冶築山古墳・角田遺跡・高岡Ⅱ遺跡・中村１号墳出土装飾大刀

平成18年３月31日発行

編集・発行　出雲市教育委員会
出雲市今市町１０９番地１
印刷・製本　有限会社　西村印刷
出雲市灘分町５０３－２